

ブログ集「二月の花」 目 次

- (88) ショパンのバラード
- (89) 資本主義と民主主義との離婚
- (90) サイバー空間と言語の恍惚
- (91) フィギュアスケート——新しい時代の幕開け
- (92) カーザ・ビアンカ casa bianca
- (93) フランス週刊誌社襲撃事件
- (94) フランス週刊誌社襲撃事件 (2)
- (95) マルチチュード Multitude——ネットワーク型対抗権力 (群体)
- (96) 3.11的思考——解決と制御
- (97) イスラム国、日本人人質事件
- (98) "Let it be"より"Let it go"へ
- (99) 白鵬発言問題
- (100) イスラム国、日本人人質事件 (2)

収録に当たって項目の移動があります。

2015.2.4

ショパンのバラード



けなかった。

バラードというのは「物語風の」という意味だが、格別にこの曲とつながる物語はない。(ポーランドの詩人ミツケヴィチの詩に啓発されたということは知られてはいるが・・・) 4 番の沈鬱さに較べてこの曲は若々しく、しかも劇的なので、バラードの中では一番人気があるようだ。出だしの陰鬱な第 1 主題に対して、変ホ長調の第 2 主題は晴れやかで華々しい。この主題は中間部で爆発し、やがて終結部のプレストのコーダにつながる。このコーダが実に劇的で何度聞いてもスカッとさせられる。

羽生結弦は 1 2 月 1 2 日のバルセロナのグランプリファイナルのショートプログラムでこの曲を使っていたが、このコーダの部分を締めくくりにしていた見事に滑りきった。彼自身がこの曲に「ノっている」という滑走シーンが何度かあり、いささか感慨にふけたものだった。

若い頃私は見よう見まねでこの曲をピアノで鳴らしていた。しかし最初の変ホ長調の第 2 主題が華々しく登場するところまでで息が切れ、あとはいきなりコーダを弾くのだが、これがまたグリッサンドのぐちゃぐちゃという感じで、弾いたあと誰にどう思われているのか恥ずかしさでいっぱいとなるような代物だった。一方、近隣のお姉さんのピアノで、夏の頃よく聞こえてきたのはショパンの「スケルツォ第 2 番」変ロ短調だった。毎日聞こえてくるのでこの曲は耳でおぼえてしまった。特に第 2 主題の若々しい流麗なメロディーはすがすがしい生命力いっぱいに夢をふくらませてくれた。この 2 曲はそんな私の青春前期の甘い夢想の世界を形づくったものだった。今この 2 番を Yundi Li のピアノで聞いてみると荒々しい激走と甘やかな花の香りが部屋いっぱいに満ち溢れる。ところでその姉さんは宝塚歌劇団のピアノ伴奏者として雇われていったそうだが、その後どうなったことか・・・一方バラード第 1 番の方は、その後身近な人で演奏を聞くことが 2 度あった。一

度目は高校の音楽教室で。2度目は職場の音楽室で・・・彼女たちが薄倖であったか、多幸であったか私は知らない。しかしショパンのその曲が弾けると言うことだけで私にとっては女神のような人たちであった。

話は飛んで、この曲を滑ってショートプログラムで一位になった羽生結弦はフリーで4回転ジャンプを2回成功させ、最後のジャンプ、ルッツで転倒したとはいえ2位のフェルナンデスに34点もの大差をつけて優勝した。晴れ晴れと自分に、そして観客に拍手を送った彼は大きく前進したようだ。アンフィニッシュドな finishこそが本当の終わりののだ。



2014. 12. 21

資本主義と民主主義との離婚



山下範久は「民意が示したもの」（京都新聞 12月23日付けの朝刊論説）で経済成長と高収益を求める「資本の利益」と完全雇用や社会保障を求める「大衆の利益」の双方を両立させることは世界経済のパイが大きな時には政府にとって難しいことではないが、世界経済が停滞、不安定化する時代には両立は難しくなるとしている。いままさにその世界経済の不安定化の時代にあって、政府は政府債務をふくらませ、（赤字国債）社会保障は個人責任へと転嫁させ、なんとか財政規律と経済成長の両立を計ろうとしているが、その際

「この一本道」とは大衆の利益の声を聞くふりだけはして、実際には資本主義を守るための一本道を行くことなのだ。その傾向は結局資本主義の側に立って、大衆の利益を極力抑制していく道であって、つまりは民意として聞かれてくる声はかき消され、民主主義なるものが反故にされていく過程に他ならない。このことを「資本主義と民主主義との離婚」という。それでは離反していく大衆の政治意識をつなぎとめるものは何か？それは大衆の願望の素朴・原始的なナショナリズムの意識に訴え支持をつなぎとめる方法だ。

同じ京都新聞の翌日24日の朝刊には73年前の12月8日（昭和16年12月8日：真珠湾攻撃の日）の国民の興奮について、中川成美の「忘れられた記憶——戦争の文学再読」にかかわった記者の報告が綴られている。

この日をどのような興奮で迎えたかが様々な文学者の作品、本人の感想としてまとめられている。その一例を挙げてみると、

- ・私は急激な感動の中で、妙に静かに、ああこれでいい、これで大丈夫だ、もう決まったのだ、と安堵の念の湧くのを覚えた。（伊藤整「十二月八日の記録」）
- ・世界は一新せられた。・・・私は不覚にも落涙した」（高村光太郎）
- ・いよいよ火蓋が切られてみると、なんだかカラッとした気分で、誰彼なしに饒舌りがしたくてならなかった（上林暁「歴史の日」）
- ・言葉のいらない時が来た。必要ならば、僕の命も捧げねばならぬ。一兵たりとも、敵をわが国土に入れてはならぬ（坂口安吾「真珠」）

戦争を鼓吹した文学者、翼賛色の強かった詩人たちは敗戦後批判にさらされ、当時の作品は



社会から抹消された。しかしそれでよかったのか？中川はたとえそれらが日本人の恥部であったとしても「日本人の似姿、自画像」であったのだから、それを捨ててしまっただけにもならないのではないかと問題提起する。欧米に対して民族的な劣等感を持っていた日本人は日米開戦を＜快挙＞として受け止めたのだ。（少し観点は地が違うが２００１年９．１１のアメリカタワービルの撃墜に、いい気味だと思った親米国でありながら、どこかの国の生粋のナショナリストではない、一般大衆がいたのではなかろうか——）

ナショナリズムは政治・社会の膠着状態に風穴をあける。それが理に適ったことではなくともハートが燃えてしまうのだ。そのようなナショナリズムが大衆の不満を吸収するために使われたりもする。

先ほどの山下の論にもどると、安倍政権は民主主義をナショナリズムで置き換えるために資本主義を人質にとり、この経済政策に賛同するなら、一本道（改憲？）もやむを得ない道だと言いたいのだ。つまり経済を再生させたいのではなく、愛国主義を進むために経済の弱みをてこにして、自分の政治的野心の道連れにしようとしていることになる。経済を人質にとられた大衆にとって民主主義よりもナショナリズムという合言葉に流されていくことは必須であり、そこに現在の政権の施策の危険がある。すなわち民主主義と離婚した資本主義はバブルと、その破綻のスパイラルを繰り返して社会を破壊する。その都度ナショナリズムへの掛け声は民主主義的議論を制圧してゆく。あとはこの膠着状態と不安定な社会を一挙に解決するには＜戦争＞という暴発しかないのだ。それは７３年も前の十二月八日への暴発であるかもしれない。歴史は繰り返す。回帰の接線が同じ破綻の接線であるなら、それを防ぐ道は民主主義の防護壁を強化していく道しかない。しかし秘密保護法は通り、改憲へは後一步のところまで日本は行き着いたのだ。鬼がでるか蛇がでるか・・・わからぬ不安。

サイバー空間と言語の恍惚

1



サイボーグ（人造生体具装人間）、サイバネティックス（生体工学）、サイバー・テロ（電子ネットワークテロ）・・・いまや<サイバー>は現代の先端を行く流行語である。コンピュータのネットワークが必需品となった現代人にとって、サ

イバー空間はもはやなくすことのできない現実となった。電子マネー、コンピュータ・ゲーム、ネット通信、個人から企業、官庁に至るまでのホームページ、これらの膨大な情報に瞬時に全世界からアクセスすることが可能になった。サイバー空間——電子的情報空間。この場合「情報」というのは

画像・映像・音響・言語的なもの一切を含んでいる。吉岡 洋は「＜思想＞の現在形」の中でこのサイバー空間（サイバースペース）について、いくつかの示唆的な問題提起を行っている。それを見ていこう。

まずサイバー空間に入っていくときの没入感についてコンピュータ・ゲームと旧来の遊びとの違いを比較している。

日常的現実から区別された「異界」へと子供たち（そして大人たち）を誘うゲームの空間は、そうした非日常体験を商品として提供する産業と密接に結びついている。商品であるというその性格上、ゲームはサイバースペースの可能性をきわめて制限された——あるいは抑圧された——形で提供する。そこでは日常的現実からの離脱（トリップ）という側面が過度に強調されざるをえないし、ゲームのストーリーとして利用されるのは、きわめて伝統的な説話的構造である。もちろんすぐれたゲームは、時間を忘れさせるほど面白い——が、同時に途方もなく退屈なのである。

もちろんたとえそうだとにしても、すくなくとも社会現象としては無視できない。ファミコンの登場以後の子供たちは多かれ少なかれそうした意味での「サイバースペース」に親しんできた。良い意味でも悪い意味でも、ファミコンはたんなる「新種のおもちゃ」以上のものである。

缶けりや鬼ごっこのような遊びも子供たちを夢中にさせるけれども、ゲームマシンのような強烈で持続的な「没入感」は生み出しにくい。それはおそらく伝統的な遊びが身体運動をとらない、現実世界をゲーム空間として想像し続けるためにたえず努力を要求するの

に対して、コンピュータはそうした努力なしにゲームの世界の中に招いてくれるからだろう。

(吉岡 洋「＜思想＞の現在形」第一章 サイバースペースの本質)

コンピュータ・ゲームにおいては伝統的な説話的構造によって、日常的現実から異界への離脱、〈トリップ〉がなされ、そこに強烈な没入感をもたらす。それに対して従来型の遊び、缶けりや鬼ごっこの場合は現実世界をゲーム空間として想像し続けるためにたえず努力を要求するためコンピュータ・ゲームほどの没入感をもたらしにくいのだ。続けて、

そして、この「没入感」こそは、サイバースペースが人間の身体にもたらす重大な変化を意味している。ゲームに夢中になる子供たちに親が不安を感じる本当の理由は、眼が悪くなるとか勉強しなくなるとかいったことではないだろう。

親にとっては子供たちが、居ながらにしてまるで別の世界に行ってしまうようなこの「没入」状態そのものが不安なのである。コンピュータが子供たちを異次元に連れて行ってしまう。いってみればそれは、コンピュータという「ハメルンの笛吹き男」に対する不安なのだ。

子供が缶けりや鬼ごっこのような遊びに夢中になっていても、また物語の本に没頭していても、心配する親はめったにいない。身体運動や言語的想像力を用いて別世界に遊ぶことは、親たち自身も慣れ親しんできたことだからである。

(同)

この「没入感」は子供を持つ親を心配させる。子供たちは、別の世界に行ってしまい、「ハメルンの笛吹き男」のように子供をさらっていくからだ。この異世界に難なくさらっていく電子ゲームは従来の言語中心の文化への非和解的敵対物であるのだろうか？

だがいずれにせよ、コンピュータゲームが伝統的な言語中心の文化の敵とみなされていることはたしかである。それは、サイバースペースのもつ陶酔的な側面、いねば「ドラッグ」的な性質のためである。

それは、かつてマンガにおける擬声語・擬態語の氾濫がそう言われたように、言語的想像力を麻痺させるように思える。電子的に合成されたゲームのBGMからは、人間が何千年もかかって築きあげてきた言語中心の文化を溶解させてゆく、悪魔のささやきが聞こえてくるかもしれない（もちろん立場を逆転すれば、それは長年にわたって人間の意識を束縛してきた、言語中心の文化構造からの解放を告げる喇叭としても聞こえるだろう）。

さて、ここで問いかけてみたいのは、はたしてそうした敵対は本当にあるのか、それともたんに一時的な見かけにすぎないのか、ということである。言語「帝国」対サイバースペース「反乱軍」との最終戦争—はたしてそんなことが、本当に起こっているのだろうか？そしてこの問いは、結局は言語とテクノロジーとの関係をどのように考えるべきか、という問題につながるものなのである。

(同)

サイバースペースのもつ「ドラッグ」的な性質はかつてのマンガ文化がそうであったように従来の言語中心文化に対する敵対物、言語「帝国」対サイバースペース「反乱軍」との最終戦争といったような様相を呈しているのだろうか？

2

ここで重要な問題として「言語」はコンピュータ・テクノロジーと対立するものかどうかということが出てくる。いま、電腦空間をヴァーチャルリアリティと言い換えてみるとヴァーチャルリアリティは言語的世界とは隔絶された世界なのであろうか？

ゲームが行われていない野球場や芝居が演じられていないステージは、日常的な空間となんら変わることはない、ただの空き地である。だがそこで試合や演劇が始まるやいなや、非日常的なもうひとつの空間が成立する。そこには、試合や劇に関係のない感覚情報は捨象されてしまい、日常的現実と比べると極度に情報の制限された、そしてそのことによってはるかにクリアで強烈な、もうひとつの現実が成立しているのである。



このようにヴァーチャル・リアリティとは、日常的リアリティから多くの情報を差し引いて成立する、より純粋なリアリティである。いわばそれは、不要な情報が間引きされているからこそ、より強力な没入感をともなうのである。

このように、ヴァーチャルリアリティの問題を、情報の削減によって強化された現実というふうに考えてみると、電子的なヴァーチャル・リアリティとそれ以前の想像的世界との連続性ははっきり見えてくるだろう。

そして、そうしたもうひとつの現実に対して人間がどのような態度をとってきたかということは、あきらかに現代のコンピュータ文化だけにかかわる問題ではないこともわかるだろう。想像的な世界への過度の没入によって頭がおかしくなるのではないかという不安は、実はきわめて古い起源を持っているのである。

日常的な現実を離脱して、もうひとつの現実を呼び寄せるために、人類は長い間、身体運動、音楽、薬物などの感覚刺激を用いてきた。そして、そうしたヴァーチャル・リアリティ発生装置のなかでも、とりわけ精緻に洗練されたシステムこそ、言語にほかならないのである。

(同)

ゲームが行われていない野球場や芝居が演じられていないステージで、やがてゲームや

芝居が行われ始めるとその次第に日常生活から離れた没入感が生まれてくる。それは「日常的リアリティから多くの情報を差し引いて成立する、より純粋なリアリティである」それまでこのようなトリップをするために人類は身体運動、音楽、薬物などの感覚刺激を用いてきた。それが最も精緻に洗練されたシステムこそ、言語だったのだ。

言語は日常生活から離れて異次元の世界に没入させる。「ドンキホーテ」のように物語を物語るといような小説は言語の反省機能（～について語る、更にその語ったことについて語る、更にその・・・n）に食い込んだ劇中劇的なトリップの仕方を可能にさせる。つまり余計な現実を間引いて作られた没入空感こそが言語によって構築された世界から生み出されていたのだ。そういう意味では言語はコンピューターゲームのトリップと実に良く似た機能を持っていることになる。

わたしたちはともすると、電子化された〈冷たい〉機械的情報に対して人間的な〈生の〉言葉という言い方をしたが。けれども、実は〈生の〉言語そのものが、そもそもヴァーチャルな世界を作り出す強力な道具なのであり、形式言語とはいわば、〈生の〉言語が本来もっていたそうした機能を拡張するために、自然言語のなかから分岐してきた器官のようなものなのだ。その意味で、形式言語と自然言語とは連続した存在なのである。

このことを別な角度からみるならば、自然言語を用いて詩や物語といった形式で展開されてきた、伝統的な言語世界こそが、サイバースペースの先駆的形態であると言ってもいい。言語はそれだけで、人間を夢中にさせる魔力を持っているのである。

（ 同 ）

「実は〈生の〉言語そのものが、そもそもヴァーチャルな世界を作り出す強力な道具なのであり」「形式言語とはいわば、〈生の〉言語が本来もっていたそうした機能を拡張するために、自然言語のなかから分岐してきた器官のようなものなのだ。」の部分に注目しよう。結局、「自然言語を用いて詩や物語といった形式で展開されてきた、伝統的な言語世界こそが、サイバースペースの先駆的形態」であったのだ。

3

言語のインナートリップは実はサイバースペースへの先駆的形態であることが、指摘された。さらに吉岡は音声言語と文字言語との違いを次のようにまとめている。

さて、新石器時代以降という長い時間——とはいえ地質学的時間からみればほんの一瞬だが——のなかでみれば、言語の発生、とりわけ文字言語の発生は、記録による知識の外部化という意味をもっていたことを思い出してほしい。

言語として外部化することによって、情報は物質的に固定可能になる。と同時に、意味は直接的明証性を失って不安定になり、翻訳や解釈といった複雑なプロセスに開かれたも

のとなるのである。

この意味作用の不安定性こそが、文字言語の大きな可能性を開いたのである。

文字言語は、記録や伝達の目的のために、たんに音声言語を固定しただけのものではない。もしそうなら、文字言語はたんに音声言語を便宜上代行するだけの存在でしかないだろうし、それは文字記号による固定化という物質的な安定性のために、直接的な意味の明証性を犠牲にしていることになるだろう。

だが、文字言語のパワーは、実はこの直接的明証性の欠如にあるのだ。文字によって対面的コミュニケーションにおける意味作用の直接性から解放された言語は、別な意味の文脈へと移植可能な、コンパクトでポータブルなものとなる。

特定の意味連関の内部で作用する音声言語を、たとえば植物体という「表現型」にたとえるなら、文字言語は圧縮された情報だけを含む「遺伝子型」である。それはつねに「突然変異」の可能性にさらされており、またそれが根づいた場所の環境に応じて、独自の発展を遂げる。

(同)

文字言語は音声言語のもつニュアンスを引き去り、より純粋化することによって音声言語の「表現型」に対して圧縮された情報だけを含む「遺伝子型」のコンパクトでポータブルなものに変貌した。それは「突然変異」の可能性さえも持つものなのだ。この文字言語の特性はコンピューターゲームがただの没入感だけに終わり易いのに対して「覚醒」的な機能というパワーをも具えるようになった。

以上によってテクノロジーと言語は対立的なものであるどころか連続的なものであることが分かった。にもかかわらずたとえば印刷メディアと電子メディアとは必ずしもじっくりとっているわけではない。あいかわらず電子ブックで読むより紙ブックで読むほうが楽しい。紙の手触り、電源など要らない手軽さ。いったん読むことを中止してもディスプレイから消えるわけではない。しかし収蔵量からすれば一枚のCDブックには及ばないし、遠く異国に送るのに瞬時に送れる電子媒体にはかなわない。現在は両者共存状態にあり、しかも書籍、新聞、といったものがなくなる気配はない。互いの便利さが徐々に融合していく段階にあるのだろう。

サイバー空間は形式言語（コンピューター言語といわゆる言語）を駆使して広大な電子的情報空間をつくった。そのことによって表現の形式、人間のコミュニケーションの形式を変えてきた。それこそ遺伝子型記号の力によって様々な変容を可能にしたのだが、この発展を誤解している人々もまた、あまたいる。そういう人への警告を吉岡は面白おかしく描いている。



コンピュータが急速に生活と文化のなかに入り込みつつある現在の段階は、ちょうど科学的知識が急速に普及しつつあった一八世紀末の啓蒙時代と、どこか似ているかもしれない。啓蒙時代には、新たな科学的自然観が常識のなかに侵入してきたために、進歩的・啓蒙的であることが、ときにはきわめて不思議なイメージに結びつくことがあったのである。

たとえば、かつて神による神秘的な徴とされていた雷は、物理現象にすぎないことが知られるようになった。「避雷針」が、こうした啓蒙的知識のシンボルとなる。すると、「避雷針」そのものが〈啓蒙〉と同一視され、その結果教育ある市民が、「避雷針が危険なものか、危険を除去するものかよくわからないままに」、傘や帽子にそれを取り付けたのである。

『ワイヤード』に代表されるようなサイバー・カルチャーのイメージや、コンピュータやインターネットの現況から連想される特徴をサイバネティクス的な文化理想と同一視するのは、いってみれば、避雷針をくっつけて得意げに歩いている啓蒙時代の進歩主義的な人々のようなものではないだろうか。かれらはいわば、二十世紀の啓蒙の申し子たちであり、はじまったばかりの変化を無邪気に喜んでいるサイバー・チルドレンにすぎないのだ。

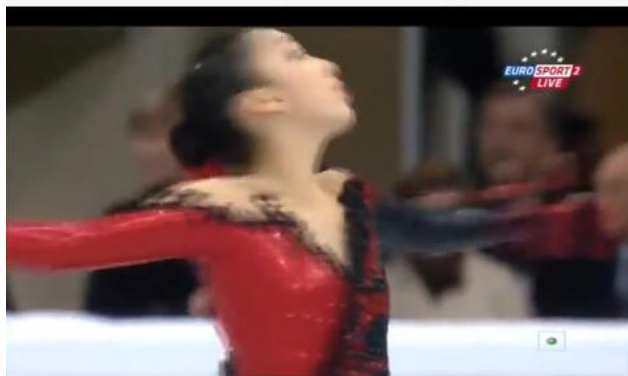
(同)

現代にはびこるサイバーチルドレン達。彼らは避雷針を真似て傘や帽子にそれを取り付けた啓蒙紳士とちつとも変わらないのだ。

さて、文字言語が人間のインナースペースを切り開いたように、サイバー空間はサイバーカルチャーの世界を切り開いた。いまやそれは後戻りをしないばかりか、あらゆる領域の交流・交換のあり方を変え続けることは間違いない。

森の散歩は快適だ。テニスをして汗を流すこと、海岸をドライブすることいずれも快適だ。そういう手触りのなかにサイバー空間はひと捻りを加えて、よりアクセントのある生活を約束するだろう。(勿論サイバー・テロのような邪悪な干渉、攻撃をするアクセスもあるとしても) 言語革命とおなじようなサイバー革命は管理・統制に使われてもいるが、統制を突破する力ももっている。そういうリゾーム状の時代、個々の生命体の＜力への意志＞が、かなえられる時代はいつやってくるのだろうか？

フィギュアスケート 新しい時代の幕開け



12月26日～28日にかけて全日本フィギュアスケート大会が長野で行われ、来年の世界選手権（ジュニアを含む）への出場選手の顔ぶれが決まった。

28日の表彰式には世界選手権の出場が決まっていた町田樹が突然引退表明をして会場を驚かせた。彼は早稲田大学の大学院一年生として今後研究生生活を送る

というのだ。確かに24歳と言うのは人生の分岐点と言うか、選手を続けるのか学生として研究生生活をやっていくのかの選択を迫られる年齢であったのだろう。その上新しいジュニアの選手たちの台頭、自身の第9プログラムの不調などが重なり、以前からの決心を実行に移した形になった。スポーツ選手の引き際と言うのはたいへん難しいものだが、18歳くらいから第一線で活躍していたとしても競技人生は6年間くらいがせいじっぱいだろう。よい戦績を残した後の仕事をきちんと展望することも大切なことだ。補欠で出場権を獲得した無良は泣いていた。

28日の女子フィギュアの焦点はいささか不振を続ける日本女子フィギュア界を今後誰が引っ張っていくかという点にあった。前日のショートプログラムでは、一位本郷理華、2位宮原知子、3位樋口新葉という順番であり、3者の差は殆どなかった。だからこのフリーでは、ひょっとすると樋口新葉が一抜けるのではないかと、43年ぶりの13歳最年少の全日本優勝もありうるかもしれないと興奮状態にもあった。ただ、同じグループで最初に「カルメン」で滑った本郷理華のデキが良すぎた。その直後に滑った樋口新葉は最初のジャンプでミスをし、全体に低調な仕上がりとなって本郷に及ばなかった。当然焦点は最終滑走の宮原のデキに女王の座はかけられることになった。赤いコスチュームで宮原は殆どノーミスで演技を終えた。結果は本郷に7点差をつける快挙での優勝だった。

さて私が推挙する選手は実は本郷理華だ。2012年全日本ジュニア選手権で優勝、2014年モスクワグランプリでも予想を裏切って優勝、技も表現力も素晴らしいが、同時に運にも恵まれている。今回のグランプリファイナルでは、さすがにロシアの強豪たちに歯がたたなかったが、それでもアメリカのグレイシー・ゴールドの左足骨折の欠場によって補欠から繰り上げ出場となったのだ。世界の強豪ロシア勢を相手に唯一日本選手として立ち向かったのだから、その経験は値万金であったろう。事実今回の全日本ではショートで宮原を押さえ、トップに立ち、新女王に輝くまであと一步というところだった。惜しくもフリーの「カルメン」が優勝に及ばない結果だったが、大輪のスケールの大きい演技を

披露してくれた。この「カルメン」はかつて銀板の女王であったドイツのカタリーナ・ビットの「カルメン」を髣髴させる。女性としての魔性の魅力たっぷりにフィギュアスケートの「物語性」に訴えかけて観客を魅了してやまない。技術だけではなく、こういった表現性の世界を大切にすることが技術性と芸術性とを兼ね備えたスケートというスポーツの魅力をもっと輝くものにする。本郷はエキシビションではマイケルジャクソンの曲を滑ったが、そういった先取の気風も含めて、何はにおいても度胸と強運によって前に進んでいくことを掛け値なく予想させてくれる選手である。

男子フィギュアにおいては羽生の結果は当然としても光っていたのは、小塚崇彦だった。ボッチェリの「これからも僕はいるよ」に載せて男のしっとりとした哀しみの表情を存分に表現しきって、殆どノーミスで演技を終えた。終わった後の激しいガッツポーズはいままで誰も見たことのない満足感を表していた。これで小塚は町田を押さえて3位入賞、世界選手権の切符を勝ち取った。

日本のフィギュア界は羽生、小塚、宇野（男子）宮原、本郷、樋口（女子）という顔ぶれで新しい時代の幕をあけた。





カーザ・ビアンカ casa bianca

1

カーザ・ビアンカとは、イタリア語で「白い家」という意味である。スペイン語ではカサブランカ casablanca 同じ意味であるが、まず

第1に毎年初夏の終わりに姿をみせる純白の百合カサブランカのことであり、また有名な映画「カサブランカ」の舞台となったモロッコの町カサブランカでもある。

この曲は1968年サンレモ音楽祭で入賞したマリーザサンニアの歌である。哀しげに淡々と歌は流れる。

C'e' una casa bianca che,	白い家がある
che mai piu io scordero;	私は絶対に忘れないだろう
mi rimane dentro il cuore	その家は私の心の奥に
con la mia gioventu.	私の青春とともに残っている

入りたくなくても入っていかなくてはならない白い家。しかも子供たちは自分のこころの中に身震いさせるものをもっており、その家から帰った後になっては、決して忘れ去ることのできない何かをそこに刻み付けて去っていくのである。

「白い家」とは何だろうか。私はそれを「純潔」と解釈していた。その家を出て行くときには少女はもはや純潔を捨てて、妥協も辞さない大人の世界に入っていく・・・同じように少年たちも自分たちの冒険を試み、傷つきながらも、それを大人になるよい経験としてこころに思い秘める。「白い家」はまさに夢と傷心の交差する舞台なのだ。

毎年初夏の終わりにいっせいに咲く白い花、天をみあげるひたむきなカサブランカ・・・私はよくこの歌を思い出したものだ。68年とは69年の前年だったのだ。69年がどんな年であったか、知っているものにはわかっている。その爆発にはもう触れたくない。また映画「カサブランカ」も象徴的なものだ。レジスタンスの闘士との争いで恋に敗れるリック（ハンフリード・ボガード）、そのトレンチコートがひと頃はやったことがあった。あくまで主人公は恋に破れたリックの方なのだ（相手に譲ったとはいえ）。傷痕の思い出に、いつまでもこだわるそのあり方にある意味で一人の男の「型」が背負われた。それはイエスの十字架ほどに重いものではなくても、苦いチョコレートのように味覚をくすぐるものだったろう。それ故いっそう「白い家」という表現がこの思いを伝えてくれる。

歌詞の後半を掲げておく（訳はネット）。

Era tanto tempo fa,	ずっと昔だった
ero bimba e di dolore	私は幼かった、そして苦痛で
io piangevo nel mio cuore	私は心の中で泣いた
non volevo entrare la.	私はその中に入りたくなかった
Tutti i bimbi come me	子供たちはみんな私のように
hanno qualche cosa che	怖くて何か身震いさせる
di terror li fa tremare	ようなものをもっている
e non sanno che cos'e.	そして子供たちはそれが何なのかは知らない
Quella casa bianca che	あの白い家を
non vorrebbero lasciare	彼らは忘れ去ることを望んでいないだろう
e' la loro gioventu che mai piu ritornera.	
	(あの白い家は) 決して戻ることのない
	彼らの青春である

2

子供は思春期に入ると、親にとってはなかなか手ごわい相手となる。丁度団塊の世代の子供たちのことを「ロスジェネ」（失われた世代）と呼ぶらしい。1970年代から80年代に生まれた子供たちの事だ。この世代は、はじけたバブルの影響で20前後に就職氷河期を迎えた世代だ。その後次第に氷河期が傾いていく。だからロスジェネレーションなのだそうだ。しかしこれは本家ロスジェネレーションには余りに安易で失礼な呼称ではなかろうか。本家の方は青年期に第一次世界大戦を経験し、壮年期にアメリカ大恐慌を経験し、老年期には第2次世界大戦を経験するという、踏んだり蹴つたりの世代で、当然虚無的な喪失の影をひきずって生きている。代表例をあげればヘミングウェイやフィッツジェラルドなどの世代だ。

思春期のこどもとのコミュニケーションに一番役立つのはJポップを共通の音楽とすることだ。そこには伝え難い思春期のところが、みごとに歌われており、面と向かって話題を振り向けなくても思春期の傷つき易いところ、憧れがあますことなく歌われている。

たとえば、わが家では藤井フミヤの「True love」やMr.チルドレンの「Inocent world」中山美穂&WANDSの「世界中の誰よりきっと」などが口ずさんでいられたたことを、ふと思い出す。

振り返るといつも君が笑ってくれた
風のようにそっと

まぶしすぎて目を閉じても浮かんでくるよ
涙に変わってく

君だけを信じて君だけを傷つけて
僕らはいつもはるか遠い未来を
夢見てたはずさ

(藤井フミヤ 「TRUE LOVE」)

この歌なんかは “君だけを信じて君だけを傷つけて〜” と
伸ばしてそれから復帰して “僕らはいつもはるか遠い未来を／夢見てたはずさ〜”
と付け足したものだ。すると恋の残酷さと時間性がくっきりと浮き上がってきた。



黄昏の街を背に抱き合えたあの頃が胸をかすめる
軽はずみな言葉が時に人を傷つけたそして君は
居ないよ
窓に反射する(うつる)哀れな自分(おとこ)が
愛しくもあるこの頃では

A h 僕は僕のままでゆずれぬ夢を抱えて
どこまでも歩き続けて行くよ いいだろう？
mr. my self

いつの日もこの胸に流れてるメロディー
軽やかに緩やかに心を伝うよ
陽のあたる坂道を昇るその前に
また何処かで会えるといいな イノセントワールド

(Mr. Children 「イノセントワールド」)

この歌なんかはもう、かなり大人な歌で、イノセントワールドの意味がちょっとわかっていないと理解不能なところがある。勿論、わが道を行こうとする青年とその恋人との齟齬をある意味では哲学的に展望し、またいつかイノセントワールドで出会えることを希求している訳なんだが。

おしまいミホリン。

まぶしい季節が黄金(きん)色に街を染めて
君の横顔 そっと包んでた
まためぐり逢えたのも きっと偶然じゃないよ

心のどこかで待ってた



世界中の誰よりきっと 熱い夢見てたから
目覚めてはじめて気づくつのる想いに
世界中の誰よりきっと 果てしないその笑顔
ずっと抱きしめていたい 季節を越えていつでも
(中山美穂 &
WANDS 「世界中の誰よりきっと」)

これなどは輝かしく時代の新しい息吹を感じさせてくれる歌だった。
こういった歌を子供たちはその成長に応じて受け止め、やがてイエロウモンキーやX (J A P A N) に
はまりながら、いつしか思春期の闇を潜り抜け大人の道を歩んでいった。思春期というものは実に厄介なものだ。苦く、切なく、果てしなく・・・

2015. 1. 1

フランス週刊誌社襲撃事件

1 1.7 パリ



1月7日午前11時半頃、フランス、パリの週刊誌シャルリエブド本社で銃撃事件が起こり、編集長のシャルボニエと風刺画家、編集幹部、警察官2名を含む12名が殺害された。犯人は「神は偉大なり（アラー・アクバル）」と叫びながら自動小銃を乱射し、逃走した。後に当人たちが落とした免許証からフランス国籍を持つアルジェリア系の男性兄弟サイド・ク

アシ（34）、シェリフ・クアシ（32）と判明。シャルリエブド社の編集長シャルボニエは過去にムハンマドの風刺画を描いてイスラム過激派からの標的になっていた。

偶像崇拝を禁ずるイスラム教の立場からすると指導者の肖像画を描くことでさえ「冒瀆」とみなされるのに、それを滑稽に茶かすことは「死刑」にも価することなのだ。シャルボニエの最近の風刺画では「パリでは相も変わらずテロは起きていない」といった挑発的なものがあつたようだ。

2人の銃撃犯はパリ北東のダマルタンアンゴルエの印刷会社に入質をとって立てこもったが、9日捜査当局の強行突入で射殺された。これと連動してパリ東部ポルトドヴァンセンヌの食品会社に入質をとって立てこもり、クアシ兄弟を逃走させるよう要求したアメディ・クリバリは9日、人質4人を射殺した後捜査当局に射殺された。（市民の中には、裁判にかけるべきだった、そうでなければ彼らの殉教を認めたことになり、敗北だと言う人もいる。）

銃撃犯のサイド・クアシは2011年にイエメンのアラビア半島のアルカイダ（AQAP）の施設で数ヶ月にわたって射撃、戦闘の訓練を受けていた。またその際、AQAP幹部のアウラキ師はムハンマドを侮辱する風刺画家を殺害するよう呼びかけ、今回殺されたシャルボニエ編集長は「イスラムに対する犯罪者リスト」に掲載されていた。

各国の反応はイスラム教圏を除いてアメリカを始めとして、ドイツ、イギリス、中国、韓国、北朝鮮、ロシア、日本・・・一様に反テロの声明を出した。（これに対してイスラム国、アルカイダ系AQMIはこのテロ行為を賞賛している。、また、テロ行為には反対だが

預言者を貶める風刺画は許されないとする国もある。)

過去におけるこういった言論に関しての事件を振り返ってみよう。以下に京都新聞に掲載された事件史を転載する。(A：2015. 1. 8 京都新聞朝刊、B：1. 9 京都新聞朝刊)

1989年英国作家ラッシュディの「悪魔の詩」を翻訳した筑波大学の五十嵐助教授が殺害された。2001年アメリカ中樞同時テロ。2011年コーラン焼却事件、2012年ムハンマド映像事件、2005年イギリス・ロンドン地下鉄テロ。2011年ロシアモスクワの空港爆破事件、2013年ボストンマラソン爆破テロ。2014年ベルギー、カナダでの発砲事件、等々挙げてみればキリがないほど世界各国で事件が起こっている。ムハンマド、イスラム教への批判は過激派にとってはヘイトスピーチのような侮辱と受け取られ、先進国に

おける疎外に対する反撃のきっかけ、戦争の重要な戦術的要素となっている。「宗教的尊厳」対「表現の自由」・・・この攻防の中で問われていることは何だろうか。少しく表現の問題として振り返ってみよう。

2 プラトンのミメシス論(詩人追放説)

(a) ミメシス論

「国家」10巻冒頭でプラトンは詩人はいかがわしいものである旨を説明する。

「たしかにわれわれのこの国については」とぼくは言った、「ほかの多くの点でもこの上なく正しい仕方でも国を建設してきたと思うけれども、しかしぼくは、とりわけ詩(創作)

過去にイスラム教と表現の自由に絡み問題になったケース	イスラム過激思想の近年の主なテロ (現地時間)
1989年2月▶英作家ラッシュディ氏の「悪魔の詩」をめぐるイラン最高指導者ホメイニ師が死刑宣告。邦訳した筑波大助教授が91年殺害された	2001年 米中樞同時テロ、計約9月11日 3000人死亡
93年9月▶反イスラム的言動を理由に、バングラデシュのイスラム組織が女性作家に死刑宣告	04年 ス페인・マドリッドで列車爆破テロ、約190人死亡
2004年11月▶夫の暴力を受けるイスラム女性を描くオランダ映画監督をイスラム過激派が殺害	05年 英ロンドンの地下鉄などで同時テロ、50人以上死亡
05年9月▶デンマーク紙が預言者ムハンマドの風刺画掲載。各国でイスラム教徒が猛反発	11年 ロシア・モスクワ郊外のドモジドボ国際空港で爆発、37人死亡
11年3月▶米フロリダ州のキリスト教牧師らが聖典コーランを焼却、アフガニスタンで抗議デモ	13年 米ボストン・マラソンで連続爆破テロ、3人が死亡、260人以上が負傷
12年2月▶アフガン駐留米軍の兵士がコーランを燃やしていたことが発覚。全土でデモ	14年 ベルギー・ブリュッセルのユダヤ博物館で発砲、4人が死亡
9月▶ムハンマドを冒瀆(ぼうとく)する米映像に反発した群衆がリビア東部ベンガジの米領事館を襲撃し、米大使ら死亡。エジプトでも米大使館襲撃	10月20日 カナダ・モントリオール近郊で軍兵士2人が車でひかれ、うち1人死亡
15年1月▶パリの風刺専門週刊紙シャルリエブドの7日 本社で複数の男が発砲、10人以上が死亡	22日 カナダ・オタワで連邦議会議事堂などが襲撃され、銃撃された軍兵士1人が死亡
	12月15日 オーストラリア・シドニーのカフェで立てこもり、人質2人が死亡
	15年 フランス・パリの週刊紙本社銃撃、編集長ら12人が死亡

についての処置を念頭に置いてそう言いたい」

「とおっしゃいますと、どのような？」と彼はたずねた。

「詩（創作）のなかで真似ることを機能とするかぎりのものは、けっしてこれを受け入れないということだ。というのは、ぼくは思うのだが、それを絶対に受け入れてはならぬということは、魂の各部分の働きがそれぞれ別別に区別された今になってみると、前よりもいっそう明らかにわかっているわけだからね」

「どうしてですか？」

「相手が君たちだから、話すことにしよう。君たちならぼくのことを、悲劇作家をはじめその他すべて真似を仕事とする人々に、告げ口したりしないだろうからね。一つまり、どうもすべてそうした類いのものは、聴く人々の心に害毒を与えるもののようなのだ。聴衆のほうで、それらの仕事がそもそもどのような性格のものであるかという知識を、解毒剤としてもっていないかぎりだね」

（ プラトン「国家」第10巻 第1節 ）

ソクラテスは「詩（創作）のなかで真似ることを機能とするかぎりのものは、けっしてこれを受け入れない」。その理由は、自身に解毒剤をもっていない限り「どうもすべてそうした類いのものは、聴く人々の心に害毒を与えるもののようなのだ」と説明する。

更に第6節、第7節ではいっそう明確に述べられていく。

「こうして、いまやわれわれは、正当な理由をもって作家（詩人）をとらえ、彼を画家の片割れと規定することができるだろう。なぜなら、真理とくらべれば低劣なものを作り出すという点でも画家に似ているし、また魂の同じく低劣な部分と関係を持ち、最善の部分とは関係をもたないという点においても、彼は画家とそっくりだからだ。

このようにしてまたわれわれは、いまや、一国が善く治められるべきならば、その国へ彼を受け入れないことの正当な理由をもつことになるだろう。ほかでもない、彼は魂の低劣な部分を呼び覚まして育て、これを強力にすることによって理知的部分を滅ぼしてしまうからだ。それはちょうどひとつの国家において、たちの悪い連中を権力者にして国をゆだね、よりすぐれた人々を滅ぼしてしまうようなもの。それと同じく、真似を事とする作家（詩人）もまた、人間ひとりひとりの魂のなかに悪しき国勢を作りあげるのだと、われわれは言うべきだろう、魂の愚かな部分、どちらがより大きいか小さいかも識別できずに、同じものをときには大と思いときには小と思うような部分の機嫌をとり、自分は真理からはるかに遠く離れて、影絵のような見かけの影像を作り出すことによってね」

（ 同 第6節 ）

詩人は「魂の低劣な部分を呼び覚まして育て、これを強力にすることによって理知的部分を滅ぼしてしまう」し、「人間ひとりひとりの魂のなかに悪しき国勢を作りあげる」ゆえに「その国へ彼を受け入れないことの正当な理由をもつ」と。

また第7節では

「そのとき（注：ホメロスの讃美者たちが詩人の必要性を訴えてきた時）君は、そのような彼らとても、精いっぱい最善をつくしている人々なのだとみなしてこれを愛し、歓迎してやらなければならない。またホメロスが最も詩人らしい詩人であり、悲劇作家の第一人者であることも認めてやらなければならない。ただし、必ず心得ておかねばならないのは、詩の作品としては、神々への頌歌とすぐれた人々への讃歌だけしか、国のなかへ受け入れてはならないということだ。もしも君が、抒情詩のかたちにせよ叙事詩のかたちにせよ、快く装われた詩神（ムッサ）を受け入れるならば、君の国には、法と、つねに最善であると公に認められた道理とに代って、快楽と苦痛が王として君臨することになるだろう」

（ 同 第7節 ）

詩の導入は「詩の作品としては、神々への頌歌とすぐれた人々への讃歌だけしか、国のなかへ受け入れてはならない」ように限られるべきだし、そうしないで快く装われた詩神（ムッサ）を受け入れるならば「法と、つねに最善であると公に認められた道理とに代って、快楽と苦痛が王として君臨することになるだろう」と断定される。う〜んこれは20世紀中頃にあったどっかの国の政策と同じだな。これが有名な「詩人追放説」なのだが（第二巻、第三巻にも関連の語がある。）

（b） 神感、入魂説

「国家」はプラトン中期(40歳~60歳)の「饗宴」を含むイデア論が展開された時期の作品である。これに対してプラトンが28歳~39歳（紀元前399~388）の時期に有名な「ソクラテスの弁明」を含む初期作品群が書かれているが、その中には詩人を重要な表現者と考える「イオン」という対話編がある。（この時期にはプラトン自身も詩作をし、溜め込んでいたが途中で破り捨ててしまったという逸話がある。）

吟遊詩人イオンは、いましがた医術の神アスクレピオスの祭礼の地エピダウロスの奉納競演で優勝して帰ってきたばかりである。ソクラテスはこの若いホメロス詩人をからかいながら詩の表現は個々の技術者たち（御者、操舵者、医者、牛飼、羊毛紡ぎ、騎手、魚釣り、笛の演奏者 etc）の専門的な物事への洞察には及ばないことを説き、それらについてうまく語れるのはマグネシアの石（磁石）が人々を結び吸いつけていくように、ムーサの女神が詩人に取り付いた限りで可能になると次のように言う。少し長いが引用する。

ソクラテス それを考えてみているのだ、イオン。そのことを私がどう思っているかを、話してあげようとしているところだ。つまり、それは、技術として君のところにあるわけではないのだ、ホメロスについてうまく語る、ということはね——これが今しがたぼくが

言おうとしていたことなのだ。それはむしろ、神的な力なのだ、それが君を動かしているのだ。それはちょうど、エウリピデスはマグネシアの石と名づけ、他の多くの人びとはヘラクレアの石と名づけている、あの石にある力のようなものなのだ。つまり、その石もまた、たんに鉄の指輪そのものを引くだけでなく、さらにその指輪の中へひとつの力を注ぎこんで、それによって今度はその指輪が、ちょうどその石がするのと同じ作用、すなわち他の指輪を引く作用を、することができるようにするのだ。その結果、ときには、鉄片や指輪が、たがいにくっついて、きわめて長いくさりとなることがある。これらすべての鉄片や指輪にとって、その力は、かの石に依存しているわけだ。これと同じように、ムッサの女神もまた、まずみずからが、神気を吹きこまれた人びとをつくる。すると、その神気を吹きこまれた人びとを介して、その人びとは別の、靈感を吹きこまれた人びとのくさりがつながりあってくることになるのだ。すなわち、叙事詩の作者たちで、すぐれているほどの人たちはすべて、技術によってではなく、神気を吹きこまれ神がかりにかかることによって、その美しい詩の一切を語っているのであり、その事情は、叙情詩人たちにしても、そのすぐれた人たちにあっては同じことなのだ。つまり、叙情詩人たちもまた、ちょうどコリュバンテスの信徒たちが、正気を保ちながら踊るのではないように、同様に、正気を保ちながらその美しい詩歌をつくるのではない。むしろ彼らが調和や韻律の中へ踏みこむときは、彼らは、狂乱の状態にあるのだ。そして、ちょうどバックスの信女たちが、河から蜜牛乳を汲みあげるのは、神がかりにかかることによってであって、正気のままでいたのではそうにできないのと同じように、叙情詩人たちの魂もまた、神がかりにかかることによって、彼らみずからが語っているそのとおりのことを行っているのだ。というのも思うに詩人たちは、われわれにこう語っているはずだ――彼らは、あたかも蜜蜂さながらに、彼らみずからも飛びかいながら、ムッサの女神たちの庭や谷にある蜜の泉から、その詩歌をつみとり、われわれのもとにはこんでくるとのこと。

(プラトン「イオン」第5節)

ホメロスをうまく語るのは詩人の技術としてあるのではなく詩人を動かしているのは「神的な力」なのだ、と。それはちょうどマグネシアの石（磁石）のように神気を吹きこまれ神がかりにかかることによって、その美しい詩の一切を語っているのであり、彼らが調和や韻律の中へ踏みこむときは、彼らは、狂乱の状態にあるのであり、叙情詩人たちの魂もまた、神がかりにかかることによって、はじめて詩を語り得ているのである。

このような詩人観はミメシス（模写）に程遠く、インスピレーション、狂乱神による入魂によって始めて詩の表現は可能になるとされている。つまり前期のプラトンは詩を重要な神から委託された表現と考えていたが、中期にいたっては国家政策、教育策として詩人は有害であるから追放されるべきだという、考えに転回していったということになる。

① 初期 神感説、入魂説、狂乱説、インスピレーション説

② 中期 模倣説、ミメーシス（模倣・描写）説

しかもプラトンを受け継いだアリストテレスは①のインスピレーション説には興味を示さず「詩学」で述べられている叙事詩、悲劇の創作にはのっけから②のミメーシス（模倣・描写）説から問題を展開しており、これが中世、近代に於ける芸術のリアリズム表現に多大な影響を与えた。一方①のインスピレーション説はロマン主義や表現主義に影響を与え、詩ではランボーの「見者」の説やシュールレアリズムの無意識の狂気の説などに取上げられ一種の預言者風の地位を与えられてもいるのである。

以上のようにプラトンは初期と中期とではその意見を変えたが、この中期の詩人無用説の根拠（虚構は人びとにあらぬ害悪を与える）は今日でも解決されていない。有害図書や、書物が犯行をそそのかすことはしょっちゅうあることだ。ある種の表現はある種の人々に不快感を与える。或いは犯罪のヒントを与える。こういう矛盾は結局解決されてはいない。

しかし権力を持たないものの＜批判＞は社会的な前進を生むことも多くある。誹謗中傷ではない表現は保護されてしかるべきであろう。また一方で、相手の人権を打ち砕くような表現（ヘイトスピーチのような）は慎まれるべきものであろう。

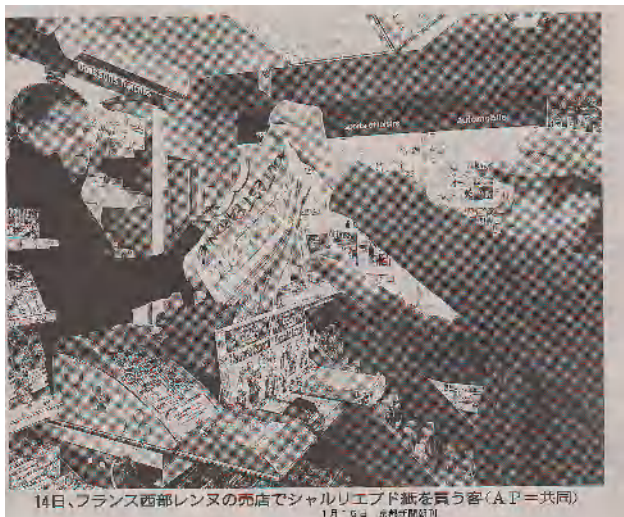
このような観点から改めて今回の事件を考えてみよう。イスラム過激派の宗教的な観点からの攻撃は自由主義・社会主義諸国の世俗主義とは相容れない。厳格な宗教的生活を国民に強制することは世俗的国家の国是に反する。それゆえこの対立は永遠に変わらない。世界には様々な宗派の民族、国民、地域住民が住んでおり、世界国家としての統一が為されているわけではない。現在、無理やりの統合は不可能であり、そうである以上共存の道を模索するし



か道はない。それを戦争、テロリズムで解決しようとするところに本来的な無理があるし、人道的な道にも外れている。しかし世界の富の分配の不公平さはますます広がっていき、飢餓と貧困で苦しむ国々は多数ある。こういうアンバランスを解決していかなくは過激なテロはやむことはないだろう。この10年来のテロリズムの歴史は21世紀が背負った重い＜十字架＞だといってよいのではないだろうか。

フランス週刊誌社襲撃事件（２）

１ 表現の自由か宗教の尊厳か



フランスの反テロデモ行進は1月11日オランド大統領（フランス）メルケル首相（ドイツ）ネタニヤフ首相（イスラエル）アッバス議長（パレスチナ自治政府）などの各国首脳50名を先頭にパリで行われたが、その動きはフランス全土に広がり、パリで120～160万人、全土では370万人に達した。

襲撃されたシャルリエブドは予定通り襲撃後に週刊誌を発刊するとして、

発行部数を当初の300万部から500万部に引き上げ、14日朝発売し、朝のうちにフランス全土で売り切れとなった。

内容はムハンマドの肖像画入りの諷刺画だった。緑の背景に白いターバン姿のムハンマドが涙を流しながら「Je Suis Charlie」（私はシャルリだ）というメッセージの紙を胸の前に掲げている。上には「CHARLIE HEBDO」のタイトル文字とその下に「JOURNAL IRRESPONSABLE」（責任を免れた新聞）という副題がついており、その下に「TOUT EST PARDONNÉ」（すべては許される）という見出し文字が躍っている。犯行を行った者も、この諷刺画も「すべて」は許されているという意味だろうか。しかし「Je Suis Charlie」（私はシャルリだ）という紙片を掲げるムハンマドの姿の意味は、決して言論を封殺することはできないと預言者自身が表明しているともとれる。

私は14日京都新聞の朝刊でこの諷刺画を見たが、その京都新聞が伝えるところによると（15日朝刊）各国の掲載の様子は以下の通り。

掲載したのは、フランス主要紙。「オーストラリアン」（オーストラリア紙・・・載せなければテロリストに対しておじけづくことになる）「タイムズ」（イギリス、「再び導火線に点火するようなもの」という見解も併載）「ワシントンポスト」（アメリカ、宗教的対立をあおるような作品には当たらない）「京都新聞」（読者への判断材料のため）「東京新聞」（読者への判断材料のため）他（日本）

一方掲載しなかったのは「ニューヨークタイムズ」（アメリカ、宗教に関してわざと人を不快にさせるような画像は基本的に掲載しない）パキスタンの英字新聞（諷刺画部分を削除・・・イスラム教に反する）「朝日新聞」（表現の自由は尊重するが、特定の民族・宗教

への侮辱を含む表現かどうかを勘案する)。

またエジプトのイスラム教スンニ派のアズハルの宗教見解部門は13日諷刺画の発行はイスラム教徒と他教徒との憎悪と差別の感情をあおるだけだ、と批判した。フランス国内のイスラム教徒の多く住むパリ北部の移民街の店員は諷刺画について「何故、自分たちの信仰や考え方を尊重してくれないのか」と嘆き、アラブ系の住民たちは事件へのコメントを拒否している。またアルカイダ系のAQAPは更なるテロを警告している。

以上のように各国の反応は「表現の自由か、宗教の尊厳か」という問題について必ずしも一致していない。「表現の自由」というまでもなく民主主義にとっては根幹となる価値観だ。様々な表現がそれなりの見解、アイデアを出して総合展開されていくのがそのセオリーであり、ある一色の考え方しか許されないような独裁的統治下では個人は死に絶えてしまう。言うべきことが言えるようでなければ、特異性と多様性を目指していこうとする社会の力強さと柔軟性は失われていき、一色の価値観に染まった息苦しい暗黒の政治しか行われなくなっていくだろう。

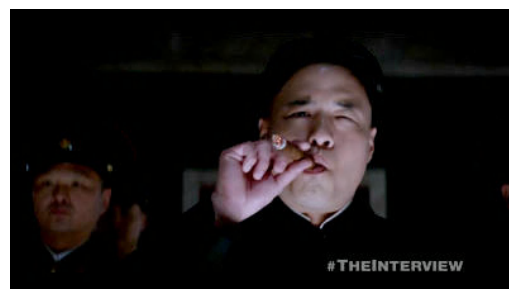
ただし、前回でも書いたが表現の公表は無制限に許されるものではない。他者の人権や社会の安寧を支える慎みのようなものも必要とされる。特に性的な表現ではこのバランスが極めて難しいことは誰でも知っているだろう。新しい展望を開く表現は大いに歓迎されなければならないが、人間の尊厳や、人道に拘わることについてはいささかの慎重さも必要となる。

2 サイバーテロ

こういった実質的なテロ攻撃の一方、サイバー空間におけるテロ事件も後を絶たない。このフランスの事件直後13日、アメリカの中央軍のツイッターがイスラム国を名のるハッカーに乗っ取られた。ハッカーは「サイバー・ジハード（聖戦）」と宣言し、「米兵よ気をつけろ」と警告した。中央軍のツイッターから北朝鮮、中国の戦力分析をした資料、米軍高官の連絡先を記した名簿が略取され、「われわれはおまえだけでなく、妻や子供のすべてを知っている」と脅した。この脅迫はそれが今すぐにも現実のものとなるのではないかという不気味さを伴っている。いまや戦争は陸・海・空・宇宙に付け加えてサイバー空間が重要な展開の場として激しい戦闘の場となっていることは明らかであろう。

振り返ってみれば、つい先だって（12月16日前後）北朝鮮の金正恩をモデルにしたソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント（SPE）のコメディ映画「ザ・インタビュー」がサイバー攻撃を受けてその脅迫のため映画館は上映中止に追い込まれたばかりだった。

「平和の守護神」を名乗るハッカー集団は9、



11を示唆して、上映予定の映画館に、もし上映したらテロ攻撃をしかける、と上映中止を迫った。12月19日アメリカのオバマ大統領はこの脅迫を北朝鮮によるものと断定し、報復を宣言した。北朝鮮の「偵察総局」はこれまでに2013年韓国の銀行・放送局に大規模なサイバー攻撃を行い、また2010年韓国海軍哨戒艦撃沈に関与したとされている。

この表現の自由を踏みにじる脅迫に対して、映画は小規模な独立系の上映館の申し出によって12月25日全米300の映画館で上映された。内容は米テレビのニュースキャスターたちが金正恩のインタビューに赴きCIAの指示を受けて金正恩を暗殺する筋立てだが、興行は大成功で初日だけでも100万ドルの収入を超え、結果的に当初見込みの2000万ドルをこえて12日間でレンタルを含めて配信収入は3100万ドルに達した。

ジャーナリストの鈴木ひとみが京都新聞1.15付け朝刊に初日に見た感想を記している。観客の多くは決して高い水準の映画ではないが、おもしろかったと言ひ、中にはこの映画はチャップリンの「独裁者」(ヒトラーを諷刺した映画)の現代版で、「身勝手な独裁者のために多くの国で虐げられた人々がいたが、そうした独裁者への強烈な皮肉だ」と鋭い批判を述べた女性の声があったことを載せている。

さて、サイバー世界の攻撃はいわばマルチチュード(ネットワーク型対抗権力)の特徴的な手法だが、マルチチュードにも善玉、悪玉がいて、味方にとっては(この場合自由主義陣営)ハッカー攻撃は革新的な抵抗ではありえず、表現の自由を侵したり、各種の秘密情報を略取する憎むべき敵対的行為となる。しかもこのサイバーテロは主体を特定しにくく、大量の情報を盗み取り、かく乱し、変幻自在に攻撃してくるから始末が悪い。

<帝国>の脅威に立ち向かう抵抗権力のことをネグリ・ハートはマルチチュードという言葉で代表させたが、そこにあるのは権力を奪われているものからの有効なく共なる抵抗手段といういわば善玉の役割を意味しているのであって、独裁者の統治手段としての情報戦術を意味しているわけではない。しかし政治の世界のことだから敵味方入り混じり、弾圧と抵抗の区別つきがたい抽象的な激突があちこちでおこっている現実には肌寒いものを感じさせる。その昔あったスパイ大作戦を今やサイバー空間の勝者が制しようとしているのだ。

3 移民社会——宗教と民族

表現の自由をめぐるパリの衝撃的な事件をめぐるもう一つの大きな課題は宗教的・民族的対立がまた浮き彫りにされ、激しくなっていることだ。

パリで行われた11日のデモにはイスラム教徒もユダヤ教徒も、アフリカも系アジア系の人々も宗教、民族の違いを超えてあらゆる層の人々が参加した。その一方で事件直後からモスク(イスラム教礼拝所)への襲撃事件が相次いでいる。7日午後、地中海沿岸ポールヌベールではモスクに銃弾2発が撃ち込まれ、8日未明、西部ルマンには手榴弾3個が投げ込まれた。中部ビルフランシュルソーヌではモスクの隣のレストランで爆発が起き

た。その他多くの反イスラム的行為が頻発した。フランスでは近年移民排斥を訴える極右政党「国民戦線」が支持を拡大しており、キリスト教徒とイスラム教徒との共存を目指す「多文化主義」への批判を強めている。



シェリフ・クアシ警視庁のアパート近くを歩く若者ら＝12日、パリ北西ジュヌビエリ(共同) 1/4 4月 12日 10時40分

一方、パリ郊外の移民街ジュヌビエリのイスラム系の若者は「フランス人として認めてもらえない」と疎外感を訴え、アルジェリア系の男性は、「大学の博士課程まで出たのに仕事は見つからなかった。フランスで育ったのにフランス人としては認められない」と怒りを露わにする。こうした疎外感を持った若者たちは過激派への勧誘を受け、一匹狼や小集団のグループを作るようになる。

テロ事件を起こしたシェリフ・クアシもここの住人だった。

ところで、襲撃事件で殺害されたイスラム教徒の警察官アハメド・メラバの家族は「過激派とイスラム教徒を混同しないでくれ、モスクへの襲撃をやめてくれ」と涙ながらに訴えた。殺されたアハメドはアルジェリア出身のフランス人で「フランスの警官であることを誇りに思っていた」とも。

移民社会と一般社会との断絶の深さに今回の事件の鍵がありそうだ。民族と宗教とを軸とした深い亀裂をどう修復していくのか、事態を解決するのは容易ではないことが誰にもわかることだろう。

2015. 1. 16

マルチチュード Multitude

——ネットワーク型対抗権力(群体)



pixta.jp ~745076

1 帝国と〈帝国〉

20世紀初頭の植民地主義、帝国主義の段階から、20世紀後半の冷戦の終結と情報革命の時代に何が起こったのか、ネグリ・ハートの「マルチチュード」はその間の権力形態の消息と絶対民主主義への眺望を指し示してくれる。

本書は、新しいグローバルな主権形態について考察した私たちの共著『〈帝国〉』の続編である。『〈帝国〉』で私たちは、現在形成されつつあるグローバルな政治秩序の傾向を読み解こうと試みた。すなわち、今日の世界における多様なプロセスのなかから、いかにして私たちが**〈帝国〉**と呼ぶ新しいグローバルな秩序形態が現出しつつあるかを、明らかにしようとしたのである。そのさいの私たちの出発点は、近代の列強が国民国家の主権を外国の領土にまで拡張することをおもな基盤として実践してきた帝国主義の見地からは、もはや現在のグローバル秩序を適切に理解することはできないという認識にあった。今やその代わりに、「ネットワーク状の権力」という新たな主権形態が現出しつつあり、そこには主要な国民国家に加えて、超国家的制度、メジャーな資本主義企業その他の権力が、主要な要素または節点として含まれている。私たちの主張するこのネットワーク状の権力は、「帝国主義的」なものではなく、「〈帝国〉的」なものなのだ。

(中略)

このように、私たちの打ち出した〈帝国〉という概念は、グローバル政治においては単独行動主義か多国間協調主義か、あるいは親米主義か反米主義かという二者択一しかありえないとする議論に、斜めから切り込むものである。まず一方で私たちは、たとえアメリカ合衆国のような最強の国家であれ、ひとつの国民国家が「単独行動をとり」、〈帝国〉のネットワークを構成する他の主要な国々との協力なしにグローバル秩序を維持することはできないと主張した。また他方で私たちは、現在のグローバル秩序はすべてのメンバーの平等な参加を特徴とはせず、それによって支えられることもできないと主張した。そればかりか、国際連合に代表される多国間協調主義的な管理モデルにおける一連のエリート国家によってすらも支えられないのである。地域的・国家的・局地的な線に沿って区切られた、冷酷で厳然とした分裂や階級秩序こそが、現在の世界秩序を明示しているのだ。

(ネグリ・ハート「マルチチュード」序)

共にある生——グローバル民主主義に向けて 太字：引用者)

国民国家が単独に植民地支配を目指したような支配の形態から、今日のグローバルな秩序が形成された段階では、国際連合に代表される多国間協調主義的な管理モデルにおける一連のエリート国家によって管理される権力形態は成り立たなくなった。つまり、〈帝国〉という概念は、「グローバル政治においては単独行動主義か、多国間協調主義か、あるいは親米主義か反米主義かという二者択一しかありえないとする議論に、斜めから切り込むものである」とネグリ・ハートは強調する。それがネットワーク状の権力を特徴とするグローバル政治の中での権力形態の姿である。すなわち、世界の支配形態の帝国から〈帝国〉への変貌。

思い切って単純化するなら、グローバリゼーションには二つの側面があるといえるだろう。ひとつは、〈帝国〉が、支配と恒常的な対立という新しいメカニズムをとおして秩序を維持する、階層構造と分裂に彩られたネットワークをグローバルに広げていくという側面である。だがグローバリゼーションには、国境や大陸を超えた新しい協働と協調の回路を創造し、無数の出会いを生み出すという、もうひとつの側面もある。これは、世界中の人のびとが皆同じになることを意味するわけではない。そうではなく、それぞれの違いはそのまま、私たちが互いにコミュニケーションしたり一緒に行動したりすることのできる〈共〉性〔＝共同・共通性〕を見出す可能性が生まれているということだ。したがって**マルチチュード**もまた、ネットワークとして考えることができるだろう。すなわち、あらゆる差異を自由かつ対等に表現することのできる発展的で聞かれたネットワーク、言い換えれば、出会いの手段を提供し、私たちが共に働き生きることを可能にするネットワークである。

（ 同 太字：引用者 ）

グローバリゼーションの二つの側面。

- 1 〈帝国〉が、支配と恒常的な対立という新しいメカニズムをとおして秩序を維持する、階層構造と分裂に彩られたネットワークをグローバルに広げていく側面。
- 2 国境や大陸を超えた新しい協働と協調の回路を創造し、無数の出会いを生み出すという側面。

2の側面はマルチチュードの可能性の側面である。マルチチュードという言葉はマキャベリが初めて使い、その後スピノザが用いた政治概念である。訳語としては「群集」「群体」などがあるが、ここで説明されているような「あらゆる差異を自由かつ対等に表現することのできる発展的で聞かれたネットワーク」のことである。いうなれば同一性の「共」ではなく、多様な差異を孕んだ〈共〉性、出会いのネットワークだ。

2 マルチチュード

マルチチュードという言葉を厳密に考えるために以前からよく使われている「人民」「大

衆」「労働者階級」といった言葉との違いが明らかにされねばならない。

まず最初のアプローチとして、概念的レベルにおいてマルチチュードを、人民・大衆・労働者階級といった、社会的主体を表すその他の概念から区別しておこう。**人民**は、伝統的に統一的な概念として構成されてきたものである。いうまでもなく、人びとの集まりはあらゆる種類の差異を特徴とするが、人民という概念はそうした多様性を統一性へと縮減し、人びとの集まりを単一の同一性とみなす。「人民」とは一なるものなのだ。これとは対照的に、マルチチュードは多なるものである。マルチチュードは、単一の同一性には決して縮減できない無数の内的差異から成る。その差異は、異なる文化・人種・民族性・ジェンダー・性的指向性、異なる労働形態、異なる生活様式、異なる世界観、異なる欲望など多岐にわたる。マルチチュードとは、これらすべての特異な差異から成る多数多様性にほかならない。

大衆という概念もまた、単一の同一性に縮減できないという点で人民とは対照をなす。たしかに大衆はあらゆるタイプや種類から成るものだが、互いに異なる社会的主体が大衆を構成するという言い方は本来すべきではない。大衆の本質は差異の欠如にこそあるのだ。すべての差異は大衆のなかで覆い隠され、かき消されてしまう。人びとのものつさまざまな色合いは薄められ、灰色一色になってしまうのだ。大衆が一斉に動くことができるのは、彼らが均一で識別不可能な塊となっているからにすぎない。これに対してマルチチュードでは、さまざまな社会的差異はそのまま差異として存在しつづける鮮やかな色彩はそのまま。したがってマルチチュードという概念が提起する課題は、いかにして社会的な多数多様性が、内的に異なるものでありながら、互いにコミュニケーしつつもに行動することができるのか、ということである。

最後に、マルチチュードを**労働者階級**から区別しておかなければならない。労働者階級という概念は今や、生活を維持するために働く必要のない所有者から労働者を区別するためだけでなく、労働者階級をそれ以外の働く人びとから切り離すための排他的な概念として用いられている。この概念は、もっとも狭い意味では工業労働者のみを指し（この場合は農業やサービスその他の部門に従事する労働者から切り離される）、もっとも広い意味ではすべての賃金労働者を指す（この場合は貧者や不払いの家事労働者など、賃金を受け取らないすべての人びとから切り離される）。

（ 同 太字：引用者 ）

たとえば、「人民」、この言葉は「多様性を統一性へと縮減し、人びとの集まりを単一の同一性とみなす」しかしマルチチュードとは「多様性」である。マルチチュードは「単一の同一性には決して縮減できない無数の内的差異から成る。その差異は、異なる文化・人種・民族性・ジェンダー・性的指向性、異なる労働形態、異なる生活様式、異なる世界観、異なる欲望など多岐にわたる。」

「大衆」という均質化する概念も同じ。「マルチチュードという概念が提起する課題は、

いかにして社会的な多数多様性が、内的に異なるものでありながら、互いにコミュニケーしつづとも行動することができるのか、ということである」

「労働者階級」は、「労働者階級をそれ以外の働く人びとから切り離すための排他的な概念」もっとも狭い意味では工業労働者のみを指す。この場合は農業やサービスその他の部門に従事する労働者から切り離される。また、もっとも広い意味ではすべての賃金労働者を指す。この場合は貧者や不払いの家事労働者など、賃金を受け取らないすべての人びとから切り離される。しかしマルチチュードの課題は、「いかにして社会的な多数多様性が、内的に異なるものでありながら、互いにコミュニケーしつづとも行動することができるのか」ということを提起することなのだ。

これに対してマルチチュードは包括的で聞かれた概念であり、近年のグローバル経済に見られる重要な転換を取り込もうとするものだ。すなわち、一方で産業労働者階級の数世界的規模では減少していないものの、この階級はもはやグローバル経済において主導的役割を果たしてはいない。他方、今日における生産は、単に経済的な見地からだけでなく、社会的生産（物質的な財の生産のみならず、コミュニケーション・さまざまな関係性・生の形態といった**【非物質的な】**ものの生産をも含む）という、より一般的な見地から考えられなければならない。

このようにマルチチュードは、これら多様な社会的生産の担い手すべてを潜勢的に含んでいるのである。ここでも、インターネットのような分散型ネットワークは、マルチチュードにとっての格好の初期イメージまたはモデルとなる。その理由は第一に、さまざまな節点がすべて互いに異なったまま、ウェブのなかで接続されていること、第二に、ネットワークの外的な境界が聞かれているため、常に新しい節点や関係性を追加できることである。

（ 同 太字：引用者 ）

社会的生産がコミュニケーション・さまざまな関係性・生の形態といった非物質的なものの生産を含む現代においては、多様な社会的生産の担い手すべてをマルチチュードは、潜勢的に含んでいる。そのイメージはインターネットがその初期的イメージとなる。

それは

- 1 さまざまな節点がすべて互いに異なったまま、ウェブのなかで接続されていること
 - 2 ネットワークの外的な境界が聞かれているため、常に新しい節点や関係性を追加できること
- が挙げられる。

3 マルチチュードの探求

マルチチュードについてはその特徴を2でほぼ描いて見せたが、もう少し肉付けをしてみよう。一つには「一」でありかつ「多」であるというマルチチュードの性格について。

マルチチュードには影の側面もある。新約聖書に出てくるよく知られた「悪霊に取りつかれたゲラサ人」の話(マルコ、ルカ、マタイの福音書でそれぞれ少し違う形で物語られている)は、このマルチチュードの悪魔的な側面に光を当てるものだ。イエスは悪霊に取りつかれた男と



出会い、その名を尋ねる。悪魔払いをするには名前が必要だからだ。すると男は「私の名前は**レギオン**です。私たちは大勢だからです」と、謎めいた返事をする。そして悪霊はイエスに、その男の身体から近くにいる豚の群れのなかに移してほしいと頼む。イエスがそのとおりにすると、悪霊に取りつかれた豚の群れは崖を下って水中になだれ込み、まるで大量自殺するかのように次々に溺れ死んでしまう。こうして悪霊を払ってもらった男は、イエスにひざまずいて感謝するという話である。

この寓話の興味深く、また厄介な点のひとつは単数形と複数形とが文法的に混在していることだ。悪霊に取りつかれた男は「私」と「私たち」というこの一人称を同時に使っているが、ここにあるのはまさにマルチチュードだ。もしかすると、この単数形と複数形の主語の混同そのものが悪霊の属性なのかもしれない。その悪魔性にさらに拍車をかけるのが「レギオン」という名前である。レギオ (legio) というラテン語はアラム語やギリシヤ語で多数という意味で広く使われていたが、同時にこれは約6000人から成るローマの軍事部隊を指す言葉でもある(今日もなおその意味で使われている)。ではなぜレギオンが悪霊の名前なのだろうか。強力な破壊力をもっているから?男のなかにいる「大勢(マルチチュード)」が一緒になって行動するから?

(第二部 マルチチュード 2-1 貧者の豊かさ 太字:引用者)

新約聖書に出てくる「悪霊に取りつかれたゲサラ人」の話では悪霊にとりつかれた私(単数)はレギオンと名乗る。レギオンはアラム語やギリシヤ語で「多数」という意味であって悪霊払いをイエスにやってもらった「私」からは、大量の霊が飛び出し豚にとりつき、狂乱する大量の豚を溺死させる。

あるいは、この悪霊の真の脅威はもっと形而上学的なものなのかもしれない——同時に単数でも複数でもあるということは、数の上での区別そのものを無意味にすることだ。多数の神が存在するのではなく、唯一の神しか存在しないということを証明するのに、神学者たちがどれだけ長々と苦労してきたかを考えてみるといい。言語学者もまた長らく、deer

や sheep の名のように単数と複数が同形であるために数を決定することのできない名詞に悩まされてきた。

政治秩序に対する脅威はもっと明白であろう。政治思想は古代の昔から、一者〔による統治としての君主制〕、少数者〔による統治としての貴族制〕、多数者〔による統治としての民主制〕という数の区別に立脚することで成立してきた。悪魔的なマルチチュードはこうした数のうえの区別をすべてかき乱す。マルチチュードは、一であると同時に多なのだ。このマルチチュードのもつ数の不確定性はあらゆる秩序原理を脅かす。そんな謀計は悪魔の仕業としかいえない。

(同)

一であると同時に多であるマルチチュードは政体的に言えば君主制（一）と民主制（多）とに変幻し政治をかく乱する悪魔的力を有する。しかし多様体であるマルチチュードが「一」でもあるというのは「個人」であるという意味ではなく＜特異性＞として＜一＞であるという意味に他ならない。即ち多様な特異性として＜共＞をなすネットワークがマルチチュードなのだ。この悪魔の有する＜共＞的肉をネグリ・ハートは次のように描写する。

こうした存在論的観点から見たとき、マルチチュードの〈肉〉は絶え間なく社会的存在を拡張する基本的な力であり、それはあらゆる伝統的な政治的・経済的価値尺度を上回りつつ生産することが明らかになる。風や海、大地を手なづけようとしても、それはつかまえようとする手の大きさをはるかに超えている。政治的秩序と管理の観点からは、このようなマルチチュードの基本的な〈肉〉は腹立たしいほどにつかみどころのないものに映る。なぜならこれは、政治的身体の階層的な器官に完全に取り込むことができないからだ。

身体ではない、この生きた社会的〈肉〉は、一見したところモンスターのように見られかねない。少なからぬ人びとにとって、人民でも国家でも、共同体でさえもないマルチチュードという存在は、近代の社会秩序が崩壊したあとの不安定と混沌のまたひとつの例にしか見えない。マルチチュードは、彼らの頭のなかでは遺伝子工学の暴走や、産業や核あるいは環境面での大災害のもたらすおぞましい結末と同類のポストモダン社会の破滅的状況にすぎないのだ。形のないもの、秩序のないものは恐怖をかき立てる。〈肉〉のもつ怪物性は自然状態への回帰ではなく社会そのものの帰結であり、人工的な生なのだ。

(中略)

だが現代のヴァンパイアはかつてのそれとは異なる。ヴァンパイアは今も社会のアウトサイダーであることに変わらないが、その怪物性は人びとに、自分たちも皆怪物——高校から追い出された者たち、性的倒錯者、社会的逸脱者、病理を抱える家庭のサバイバーなどなど——なのだと認識させる一助となっている。さらに重要なのは、これらのモンスターたちが新しいオルタナティヴな情動や社会組織のネットワークを形成しはじめていることだ。ヴァンパイアとその怪物的な生、その飽くなき欲望は旧い社会の解体を示す徴候であるばかりか、新しいものの形成を知らせる予兆ともなっているのである。

私たちはこのマルチチュードの〈肉〉のもつ怪物的な力を、いかにして新しい社会を形成するための力にするか、その手段を探らなければならない。一方ではメルロ＝ポンティが明らかにしたとおり、〈肉〉とは〈共〉である。それは空気や火や土や水のように基本的なものである。だが他方、私たちは皆特異な存在であり、一人ひとりの違いは単一の社会体を形成するために縮減されえないことも、これら多種多様のモンスターを見れば一目瞭然だ。いま必要なのは、政治体に関する近代のすべての著作に異論を唱え、マルチチュードの〈肉〉のもつ〈共〉性と特異性の新しい関係を理解するための、いわば反・物体論である。

(同 2-3 マルチチュードの軌跡 怪物登場)

風や海、大地を手なづけようとしても、つかまえようがないように、マルチチュードの基本的な〈肉〉はつかみどころのないものであって、政治的秩序と管理の観点からは、腹立たしいことこの上ない。しかしこのようなヴァンパイアは新しいものの形成を知らせる予兆でもある。それゆえ、マルチチュードの〈肉〉のもつ〈共〉性と特異性の新しい関係を理解する必要がある。このことは、もう少し具体的に次のように述べられている。

いうまでもなく、マルチチュードに対する私たちのアプローチと一八世紀の新しい科学との間には大きな違いがある。そのひとつは、フランスと北米の啓蒙の預言者たちが作ろうとした社会を映す鏡としての制度は、巧妙に歪められた鏡——多様なマルチチュードから統一的な人民を作り出す鏡——だったということだ。合衆国の一ドル札の裏にあしらわれた驚がくわえた旗には、今でも「多数からなる一 (E pluribus unum)」という文字が書かれている。だが今日、グローバルなマルチチュードをひとつの人民に還元するというのは的外れな考えである。グローバル社会は〈共〉の恒常的かつ過剰な生産という生政治的ダイナミクスに覆われており、あまたのグローバルな主体性は複数であると同時に特異な単数でもあるという確固とした自己認識をもっている。新しい民主主の概念はこうしたマルチチュードの構成的ダイナミクスと、その複数性が〈一〉(unum)に還元されることを拒否するという事実を考慮したものでなければならない。

(同 第三部 3-2

グローバルシステムの改革提言 十八世紀に回帰せよ！)

多様なマルチチュードから統一的な人民を作り出す歪んだ鏡であったフランスと北米の啓蒙の預言者たちが作ろうとした制度を超えて、〈共〉の恒常的かつ過剰な生産という生政治的ダイナミクスに則った「複数であると同時に特異な単数でもある」マルチチュードが対抗権力を純正なものに仕上げていくだろう。

4 マルチチュードへの批判

「マルチチュード」第二部の終わりにネグリ・ハートはマルチチュードへの批判に答え

る形で読者の疑問に対応している。その部分を少し検討してみよう。

現代は労働組合や産業労働者階級が左派政党を支える基盤を失い、かつての左派は中道を通り越して労働組合への攻撃、戦争への加担という、右派と見分けがつかないようなところまでシフトしてしまっている時代である、という嘆きから始まって、それよりもっと深刻なのは「左翼とは何か」の概念が崩れてしまったことにあるとして次のように述べる。

だが私たちの見るところ、もっとも深刻なのは、左翼とは何であり、何になりうるかにについての概念的欠如である。ソヴィエト式の国家社会主義と社会民主主義による福祉国家という主要な古いモデルはともに完膚なきまでに信用を失ったが、それには正当な理由がある。古い時代を懐かしむ一部の人の癖とは、急進的な学者たちが左翼を乗っ取り、理にかなった改革提言を行う実践的作業を放棄して、学者仲間であればお手あげの複雑で訳のわからない政治的議論に終始していると非難する。また、多文化主義やアイデンティティの政治を奉じる勢力が左翼の担うべき公共的役割を骨抜きにし、文化的な問題ばかりに明け暮れて本来の政治的・経済的問題を置き去りにしているとの非難もある。こうした非難は敗北の大きな徴候であり、危機に適正に対処するための新しいアイディアが一切生まれていないことを物語っている。もし今後左翼が再生し、改革されることがあるなら、それは新しい実践、新しい組織形態、新しい概念にもとづくものでしかありえないだろう。

今日新しい左翼について語るには、一方で、過去のイデオロギーとの物質的・概念的な断絶にもとづくポスト社会主義的・ポスト自由主義的プログラムという視点が必要である。すなわち、産業労働者運動のイデオロギー的伝統、その組織、それが手本とした生産管理のモデルといったものと存在論的に訣別しなければならないということだ。また他方では、新しい人間学的リアリティ——あくまで特異性を保つ生産の新たな行為体と搾取される主体——に対応することも必要である。特異的なエージェントの活動を、各人全員の自由と多数多様性のマトリックスだとみなすことが必要なのだ。

（ネグリ・ハート「マルチチュード」第二部 補説2 組織化——批判に応える）

要約してみると・・・ソヴィエト式の国家社会主義と社会民主主義による福祉国家という主要な古いモデルは完全に信用を失い、それに替わる急進的な学者や多文化主義や、アイデンティティの政治を奉じる勢力は、政治的・経済的問題を置き去りにしている、と批判されている。すなわち、こういう傾向にこそ、新しい実践、新しい組織形態、新しい概念が欠如している証拠なのである。ポスト社会主義的・ポスト自由主義的プログラムを導入するためには、産業労働者運動の生産管理のモデルから、存在論的に訣別しなければならないし、多様性と特異性とを同時に生きる新しい人間学的リアリティが必要であろう。

新しい**生政治的**（バイオ・ポリティックス）に必要なのは「民主主義」それも絶対的民主主義に到達することであり、かつて「自由追求のために平等を犠牲にした」自由主義や「平等追求のために自由を犠牲にした」社会主義の野蛮な世界から訣別して「自由も平等も」ともに実現しうる政治的プログラムに、マルチチュードの概念が貢献するはずである、と

ネグリ・ハートは述べて、各種の批判に答えている。ついでにこの後続く文章では「二つの時間性」について触れていることも挙げておこう

- (1) **永遠としてのマルチチュード**・・・スピノザのいう理性と情念を通じて権威と命令を拒否し、差異としての特異性を表明し、無数の反乱と革命によって自由を追求してきたマルチチュード（**絶対的民主主義**への道）。
- (2) **歴史的マルチチュード**・・・実際にはまだ姿を現してはいないが、政治的に潜在的に存在しているマルチチュードによって政治的なプロジェクトとして登場してくるもの。

このような「常に～すでに」と「いまだ～ない」という2つの時間性をマルチチュードは生きている。

さて、批判に答えている、その中からいくつかを拾ってみよう。

① **マルチチュードはアナーキズムか前衛主義か？**

マルチチュードは自然発生的でアナキーなものではなく、「間の空間」、コミュニケーションからなる社会的相互作用、＜共＞の世界から立ち上がる。

またグローバルな抵抗運動を好意的に扱うのは「新たなるレーニン主義ではないのか？」という批判に対しては、ゲサラ人に取り付いたレギオンのように「一」とであると同時に「多」である姿を思い浮かべてみよう。「多」であるというのは個の特異性、多様性があくまで尊重されるということであるし、「一」とであるというのは個に終始しない＜共＞によって立ち上がるマルチチュードの特性によっている。単に前衛主義の「一」と、いうわけではない。

② **マルチチュードは経済主義に傾いており、政治的ではない。**

産業労働者を批判しているのではなく、その存在を認めながらも、「**非物質的労働**」（情報革命時代の新しい協同労働）が主に位置を占めつつある実態を強調している。この「非物質的労働」が私的所有を囲い込めない領域を作り出すマルチチュードの基盤となる。それが前衛として政治的立場を主導する勢力に、ならねばならないとは言っていない。つまりマルチチュードの立場は「ポストモダンのレーニン主義」でもなければ、「マイクロソフトのプログラマーが輝かしい前途を開く」世界とも言っていない。

また、マルチチュードは、ただの経済主義ではなく、人種、ジェンダ、セクシュアリティなどの社会的差異については差異と特異性の尊重するという基本的なマルチチュードの性格からして、これらを包含している。

③ マルチチュードは悪しき弁証法の産物か？

マルチチュードは＜帝国＞（「一」）とマルチチュード（「多」）との闘いだと言っているが、それは弁証法の焼き直しではないかという議論には、マルチチュードは二者択一ではなく、「多」でもあり同時に「一」でもあるという在り方なのだと答えている。

また脱構築主義からは、マルチチュードの内部に対してはその外部が必ず存在する。（外部が存在しなければ内部は存在できない・・・だからマルチチュードは外部を包含できない）そして、その外部（従属的な人びと）をマルチチュードは忘れている、という批判には「分散型ネットワーク」としてのマルチチュードには外部・内部の境界は定かではなく、**節点**（ノード）として、外部・内部をむすんでいるだけなので明確な境界はない。だから外部（従属的な人びと）は排除されているわけではない。実践的プログラムとして包含されていくものだ、と答えている。

以上３点を掲げたが、これ以外にこの補説にはないが、次のような批判もある。

④ マルチチュードには善玉、悪玉といったものがあるのではないか？

これに対しては私が考えるには＜帝国＞対＜抵抗勢力＞の構図の中では＜抵抗勢力＞の方が善玉であるように見えるが、実際には逆転することもあるだろう。この逆転という意味はネグリ・ハートが散々言い尽くしていることだが、主権奪取に当たっては旧来の主権モデルの水準で奪取した権力は現権力と同じか、それ以下の水準の権力にしかならない、ということの意味している。ソビエトのスターリン主義、カンボジアの大虐殺、日本では連合赤軍、オウム真理教などの武装革命はその水準で戦われたもので運動が持続・完成したなら、ただの恐怖政治しかやってこなかっただろう。

そういうわけで弾圧＝悪、抵抗＝善という風に単純に色分けはできないのだが、ひとつの目安として、＜帝国＞的な主権を目指すものに対して、自由と平等を両者とも失わない抵抗を可能にするマルチチュードこそ「絶対民主主義」を実現する抵抗権力であるという観点からその政治的未来性を考えるということが大切だ。

（ 付言すれば、イスラム過激派＝悪、アメリカ・ヨーロッパ自由主義＝善 といったような区分けから始まるのではなく、両者の対立を丹念に解きほぐし、真の対立の原因、そのギャップを埋める道に賭けていくことこそが未来に繋がるものだ。坊主憎けりや袈裟まで憎い方式に、互いを殲滅、根絶しようと争うことは決して未来への道ではありえない。日本国内では７０年代に長びいた「新左翼」——いまではもう旧左翼だが——の内ゲバの凄惨さと不毛を思い出すべきだ。）

⑤ 資本主義の終焉＝剰余価値の終焉というのはいくらあるか？（大澤真幸）

大澤真幸は「絶対的民主主義への道はどこに？」の中でマルクスの資本主義における生産力の向上がやがて生産関係を桎梏と感じ、その関係（資本家と労働者との関係）を崩壊させ、資本家の撤退と共産主義への道が切り開かれる、というストーリーをなぞって、＜帝国＞対マルチチュードとの対立は、非物質的労働を主体として、＜共＞のネットワークを拡大していくマルチチュードの力が、資本の私的所有を桎梏と感じ、廃棄していく過程にマルチチュードの絶対的民主主義への道がある、と説明する。＜帝国＞の基盤となっている資本主義の終焉は、すなわち私的所有を不可能にする「剰余価値の終焉」によって可能になるのだ。

ここで、ネグリとハートの議論の構成をもう一度、ふりかえっておこう。＜帝国＞としての形態をとった資本主義の展開の先には、資本主義の自己否定としての絶対的民主主義が出現する。このような構図で考えたとして、どの地点で、資本主義から絶対的民主主義への越境が果たされるのか。それは、剰余価値というカテゴリーが放棄されたときである。

生産と交換を通じて剰余価値が発生し、それを特定の階級が領有する。そのような関係が成り立っている限りは、資本主義であり、階級的な支配と搾取は残っている。が、やがて、資本主義が複雑化し、非物質的労働が支配的な労働の様式になってくると、剰余価値を私的所有の制度の中に囲い込み、それを特定の人や階級の領有に帰する、という方法が、さらなる生産力の発展にとっては障害物と感じられるようになるだろう。価値は、コミュニケーション的な関係性の全体の中から発生しているので、それを誰か一部のものの所有物と見なすことはできないように見えるからである。つまり、価値は＜共＞に属する富、「コモンウェルス」だからである。剰余価値（の領有）などというものがなければ、資本主義はもっと健全に思う存分発展するのに、……とそのように感じられるのだ。そこで、剰余価値（を誰かが領有するという関係性）を廃棄したらどうなるだろうか。剰余価値なき資本主義、資本主義なき資本主義が得られるだろうか。それこそが、求めている絶対的民主主義に固有の生産様式となるだろうか。

（ 大澤真幸「絶対的民主主義への道はどこに？」

アントニオ・ネグリ「ネグリ、日本と向き合う」所収 ）

「資本主義が複雑化し、非物質的労働が支配的な労働の様式になってくると、剰余価値を私的所有の制度の中に囲い込み、それを特定の人や階級の領有に帰する、という方法が、さらなる生産力の発展にとっては障害物と感じられるようになるだろう。」こうして剰余価値なき資本主義がやってきて、それこそ相互支配のない、絶対的民主主義の世界を切り開くであろう、というのがネグリのセオリーだと大澤は指摘する。しかし、果たしてそんなことはありうるのだろうか？大澤の見解は否定的である。

断じてそうはなるまい。剰余価値が、ある段階で、資本主義の本性に反する邪魔者のように感じられるようになる。だから、剰余価値さえ取り除けば、資本主義のよいところだ

けが、つまり資本主義の解放的なポテンシャルや富の生産能力だけが得られるだろう、と想像したくなる。だが、剰余価値が、発達した資本主義にとっていかに不適切なカテゴリーに見えようとも、それを除去すれば、資本主義そのものを、ポジティブな側面を含む資本主義のすべてを失うことになるだろう。剰余価値を求める競争だけが、資本主義を駆動させる唯一の原因だからである。剰余価値をめぐる競争は、資本主義を可能にする超越論的条件である。剰余価値は、資本主義の十全な発展に制限を加えていると同時にその可能性の条件にもなっているのだ。

剰余価値は、鳥にとっての空気に似ている。鳥は飛びながら、空気の抵抗を感じ、空気さえなければもっと自由にどこまでも飛んで行けるのに、と嘆いている。しかし、空気を取り除いた真空状態では、鳥はまったく飛ぶことができなくなるのだ。飛翔を妨げていたその障害物こそが、飛翔を可能にしていたからだ。剰余価値と資本主義の関係もこれと同じである。

(同)

「剰余価値は、鳥にとっての空気に似ている。鳥は飛びながら、空気の抵抗を感じ、空気さえなければもっと自由にどこまでも飛んで行けるのに、と嘆いている。しかし、空気を取り除いた真空状態では、鳥はまったく飛ぶことができなくなるのだ。」そうであるのはつまり、「**剰余価値を求める競争だけが、資本主義を駆動させる唯一の原因だからである**」ということになる。なぜなら「剰余価値をめぐる競争は、資本主義を可能にする超越論的条件である。」からだ。

剰余価値に向かって対象の欠如を埋めるために欲望が動き始め競争が始まる。対象の欠如は資本主義の駆動力である。この駆動力がなくなれば資本主義は死に絶える。資本主義の生産力がそのまま生き残ることはないのだ。しかし、ネグリ・ハートはドゥルーズの影響を受けて「欠如」がなくても「欲望」は動く想定した。普通「空腹があるので食べたい欲望が働く」と考えるが、ドゥルーズ風に言うと「食べたい欲望が働くので空腹を感じる」ということになる。欲望はこのように対象がなくても働く「純粋欲望」、「欲望機械」の純粋欲望なのだ。そうすると、欠如があろうがなかろうが、剰余価値があろうがなかろうが生産への純粋欲望は働くから、私的所有を廃棄する剰余価値の廃棄は生産への欲望を抑制することはない。資本主義の搾取・抑圧の部分は取り除かれ増大する純粋欲望の富と快楽が溢れ出す・・・

いやしかし、そんなうまい話はない、というのが大澤の判断である。対象の欠乏への駆動という極めて動物的な・かつ人間的な欲望あってこそその競争なのであって、クレイゴトで人は働いたりはしない！ 剰余価値に向かう財的欲望がなければ人は怠け者になって無気力になり、生産は低下していくだろう。

大澤は剰余価値を求める資本主義という一神教の外部に出る道はあるだろうし（無神論）そこに支配一被支配の関係でない共同性（アソシエーション）の実現の可能性もある、と考える。資本主義という一神教の内部で剰余価値の略取に狂奔する限り、絶対的民主主義

などはやってこない、というのが彼の結論だ。

はたして、ネグリ・ハートの見解は単なる夢想、楽観論に過ぎないのであろうか？

5 戦 略——エクソダス？

抵抗の方法としてのエクソダス（脱出）。

戦争の役割のこうした移行は第一部で論じたように、主権権力が用いる暴力の正当化メカニズムに反映している。暴力はもはや法体系や道徳的原理を基盤にして正当化されるのではなく、暴力が行使された後に正当化されるものでしかなくなりつつある。正当か否かは暴力の効果、すなわち秩序の創出や維持にどれほど貢献したかにもとづいて決まるのだ。この観点からも、近代の優先課題の順序が逆転したことがみてとれる。まず第一の基盤は暴力であり、政治的あるいは道徳的交渉は暴力の結果をふまえて行われる。民主主義の可能性の出現によって、主権はかつてないほど純粋な支配と暴力の形態を採用することを迫られている。

民主主義勢力はこの主権の暴力に対抗しなければならないが、それはシンメトリックな対極との対決であってはならない。たしかに民主主義を平和をもたらし絶対的な力として、主権による永続的な戦争とは正反対のものとみなすことは理にかなっているかもしれないが、そうした概念対立は現実の状況にはほとんど対応しない。今日現出しつつある民主主義勢力は暴力的状況のさなかにあり、それを無視することも消えてなくなるよう願うこともできない。



今日の民主主義は主権から身を引き離す、あるいは逃亡や脱出という形をとるが、聖書の物語にもあるようにエジプト王ファラオはユダヤ人が平和裡にエジプトを出ることを許さない。そこで10の災いがエジプトにもたらされる。アロンはファラオの追跡軍と後衛戦を強いられ、ついにはモーセが紅海を二つに割って渡ったあとにエジプト軍が水に飲まれて

全滅したことで脱出は成功するのである。

この聖書のエピソードは弁証法的な規則（平和主義理論に広く行きわたったもの）がありえないことを示している。その規則によれば、マルチチュードが脱出するさいには主権権力の攻撃に対してそれとシンメトリーをなす反対の対応をとらなければならない。すなわち抑圧的な暴力に対して、暴力の絶対的な欠如によって立ち向かわなければならないのである。しかし脱出はかつて一度も平和的で融和的なものであったことはなく、将来もまたしかりである。モーセとその兄アロンは平和的ではなかったし、エジプトにもたらされ

た災いも平和的とは程遠い。あらゆる脱出は積極的な抵抗後を追ってくる主権権力に対する後衛戦を必要としている。ジル・ドゥルーズはいみじくもこう言う。「逃走せよ。だが逃げながら武器を取れ」

(ネグリ・ハート「マルチチュード」第三部)

マルチチュードの民主主義 逃げながら武器を取れ！)

「暴力はもはや法体系や道徳的原理を基盤にして正当化されるのではなく、暴力が行使された後に正当化されるものでしかなくなりつつある。」このような正当化の逆転の時代には、シンメトリックな対極との対決は考えられないが、暴力的状況のさなかにあっては、それを無視することも、消えてなくなるよう願うこともできないほど状況は、厳しいものだ。その例としてネグリ・ハートはモーゼの「出エジプト」(エクソダス)を挙げる。脱出はかつて一度も平和的で融和的なものであったことはなく、あらゆる脱出は積極的な抵抗後を追ってくる主権権力に対する後衛戦を必要としている。まさしくドゥルーズの言うごとく「**逃走せよ。だが逃げながら武器を取れ**」である。

したがって脱出と民主主義の出現は、戦争に対する戦争だということができる。だがここには概念的混乱の落とし穴がある。民主主義が主権とは反対の戦略をとり、永続的戦争に対して純粋な平和主義を対峙させることができないとすれば、両者の違いはなくなってしまうのか？ 戦争に対して戦争で応えるというのはまったく無意味なことなのか？ こうした混乱は物事を対立関係でとらえることから生じる。力や暴力を民主的に使うことは、主権による戦争と同じでもなければその反対でもない。それは主権の戦争とは異なるものなのだ。

第一に、新しい主権の配置においては戦争が主要な役割を担い、政治の基礎を形成するのに対して、民主主義が暴力を用いるのは政治的目標を追求する手段である場合に限られる。実際、この政治的なものへの軍隊の従属はメキシコ、チアパス州の**サパティスタ運動**の原則のひとつとなっている。サパティスタは多くの面でラテンアメリカのゲリラ軍の伝統を採り入れつつ、そこにひねりの効いた変更を加えている。彼らは自分たちを軍隊と呼び、そこには司令官もいるが、伝統的な軍の構造は逆転させられている。伝統的なキューバ・モデルでは迷彩服を着た軍事指導者が最高の政治的権力をもつのに対し、サパティスタではあらゆる軍事活動が従属的なものとなり、それは共同体の政治的意志に仕えなければならない。暴力を政治に従属させるというのは、私たち一人ひとりが肝に銘じるべきことでもある。「勝利が、戦争を愛することなく戦争を起こした人間のものとならんことを」とアンドレ・マルローは言った。暴力を政治に従属させることは、暴力の民主主義的な使用にとって十分条件にはならないが、必要条件ではあるのだ。

(同 太字：引用者)

民主主義が暴力を用いるのは政治的目標を追求する手段である場合に限られる。軍事が政治を恫喝して動かすようでは、政治はなくなって軍事独裁が残るばかりだ。この政治の

正しい統制として、この書でしばしば引用されているメキシコ、チアパス州のサパティスタ運動が取り上げられている。軍事指導者が最高の政治的権力をもつキューバ・モデルに対して、サパティスタではあらゆる軍事活動が従属的なものとなり、それは共同体の政治的意志に仕えなければならない。まさしく、マルローの「勝利が、戦争を愛することなく戦争を起こした人間のものとならんことを」である。

6 テロリズムを超えて

最後に抵抗における武器とは何かを述べている部分を取りあげよう。

私たちが真に必要としている武器とは、支配的な軍勢力と対称的な力をもとうとしないだけでなく、現代の暴力の多くの形態に見られる悲劇的な非対称性を崩すものでなければならない。そうした暴力の形態は現行の秩序を脅かさないばかりか、新たに奇妙な対称性



——軍当局は自爆者の不正な戦術に激怒し、一方の自爆者は独裁者の傲慢に憤激するという図式——を生み出してもいる。

〈帝国〉の支配勢力は、テロとは弱き者が権力の非対称に対抗するために携帯可能な新兵器を使って多数の罪のない人びとを傷つけるものだとして、その考え方そのものに慨嘆の意を表す。だがおそらくテロは起きるだろう。しかしテロは世界を良くすることも、権力関係を改善することもできない。それどころか権力の掌握者たちにその力をますます強め、人類と生の名の下に権力を統合する必要性を主張させるだけだ。実際のところ、マルチチュードのプロジェクトにとって適切な武器は、権力の武器とは対称的な関係にも、非対称的な関係にもない。そのいずれも、逆効果と自滅的な結末しかもたらさないのだ。

(同)

現代の暴力の多くの形態に見られる悲劇的な非対称性——たとえば**自爆テロ**は「独裁者の傲慢に憤激する自爆者」「自爆者の不正な戦術に激怒する軍当局」という不毛な対立を生むだけであり、支配権力は「弱き者が権力の非対称に対抗するために携帯可能な新兵器を使って多数の罪のない人びとを傷つけるもの」と非難する。結局、権力の掌握者たちにその力をますます強めるだけで、決して「テロは世界を良くすることも、権力関係を改善することもできない。」

それではマルチチュードの戦術とはいったいなんだろう。

新しい武器についてのこうした考察をふまえると、殉教という概念が明確になってくる。

さまざまな宗教の伝統において、殉教は大きく二つの形に分けられる。そのひとつは自爆者を代表とする殉教で、不正義の行いに自己破壊を含む破壊行為をもって対抗するというものだ。もうひとつの殉教は、これとはまったく異なる。こちらの場合、殉教者は破壊を目指さず、力ある者の暴力にただ打ち倒されるのみである。この殉教の形態は実のところ、一種の証言なのだ。それは権力の犯す不正義についての証言というより、新しい世界の可能性——特定の破壊的な権力ではなく、すべての破壊的権力に対するオルタナティブ・——を示す証言である。プルタークの描いた英雄からマーティン・ルーサー・キングにいたる共和主義の伝統全体は、この二番目の形の殉教を基盤にしている。この殉教は実際には愛の行為、すなわち現在の主権に抗する、未来に向けられた構成的行為にほかならない。

しかし、私たちがこの二番目の殉教——新しい世界の可能性を証言する共和主義的殉教を取り上げたからといって、そうした行動への呼びかけや誘いと解釈しないでいただきたい。そうした殉教を追い求めることは馬鹿げている。この殉教は、もしなされるとすれば現実の政治的行動やそれに対する主権の側からの対抗措置の副産物でしかないのだ。私たちはいうまでもなく、殉教とは別のところに、政治的アクティヴィズムの論理を探し求めなければならない。

(同)

殉教には自爆テロ型の殉教と、マーティン・ルーサー・キングに象徴されるような殉教があつて、後者の「証言」としての行為を推奨しているわけではないとして、ネグリ・ハートはカーニヴァルのパフォーマンズやアリストファネスの「女の平和」に見られたようなセックス拒否のような意想外の戦術などを挙げて見せるが、まだ模索中とのことである。

現代は性急な時代である。現代人は長期決戦に耐えられない。何でも短期決戦で解決されることを良策とする。それだから深遠さは、必要ないものとして退けられる。長い不毛な三十年戦争、応仁の乱が終わって初めて人びとは某かの真理に到達する。しかし失われた十年はあくまで十年だ。幻影と虚無に欺かれる人生をその時代に賭けることを誰が望むであろうか？しかしロスト・ジェネレーションの世代は第一次世界大戦、大恐慌、第二次世界大戦を生涯のプロセスとして生きざるを得なかったし、人間と権力の栄枯盛衰の無惨さを身をもって体験せざるを得なかったのだ。そして、いつの間にか似たような無惨な時代に投げ込まれていることを、明敏に告げ知らせるものが誰もいないとき、我々は＜不幸な意識＞をひきずりながら、影となって本体を追い求めるに違いない。ああ、いまの私は本当の私ではないのです・・・

3. 1 1 的思考——解決と制御



1

「思想としての3. 1 1」という2011年3月から2ヶ月後くらいに依頼した、或いは発表された論考を集めて6月に出版された本を何気なく

バラバラとめくって読んでみると、いくつかの論考が目にとまった。

たとえば、高祖岩三郎は当時の状況を次のように書いている。

日本という記号は、その外部にとって、これまで多かれ少なかれある種の先駆的形象を体現してきた。史上唯一の原爆体験、戦後の奇跡的経済復興、新しい技術革新、理想的管理社会、大衆消費社会の実現、ポストモダニズムの一つの様相、アニメなどの大衆文化、十年以上続く不況下での社会統制、そして福島が到来した。福島において、決定的なのは、現代社会のこうした一つの理想像が内破したことである。原子力事故をきっかけに、最も先進的な資本主義国家が、その消費管理社会が、その内的問題と限界を、これ以上無い黙示録的な様相をもって自己提示したことである。それは、これまで「人類の進歩」とされてきた「装置」の一つの到達点—エネルギー供給の効率化と生産の高度化、情報／科学技術、それらと複合的に絡まり合った官僚機構と市民社会が災害をきっかけに自己崩壊し、資本主義的發展に駆動された人間的存在の際どい限界を、地球内在性との関係で開示してしまったことである。

この開示は、新しい残酷を人類に強要し始めた。それは異なった強度の放射線被爆を民衆の日常生活にもたらしたことである。被爆の日常化と天文学的時間においてしか消失しないその影響は、全ての軸的領域——たとえば日常生活、労働、社会関係、統治、闘争——において現われ、それらを再規定してしまう。

（ 高祖岩三郎「3. 1 1以降の地球的アナキズム」 ）

彼は言う、日本という記号は、ある種の先駆的形象——史上唯一の原爆体験、戦後の奇跡的経済復興、新しい技術革新、理想的管理社会、大衆消費社会の実現、ポストモダニズムの一つの様相、アニメなどの大衆文化、十年以上続く不況下での社会統制などを牽引してきたのに、その最後に福島を突きつけた、と。＜福島＞は、こうした戦後社会の一つの理想像が内破した事態であった、と。このことはエネルギー供給の効率化と生産の高度化を求めるあまりの官僚機構と市民社会の自己崩壊であったし、被爆の日常化と天文学的時間においてしか解決し得ない原子炉の管理という残酷を現実強要し始めた。

高祖が掲げているポール・ヴィリリオのエピグラムがまたおもしろい。（面白がっている

場合ではないが)

もし「発明」なるものが実際は、「偶然」を記号として、そして好機として見る一つの見方でしかないならば、今こそわれわれの展示場を即興に、つまり科学とテクノロジーの「非直接的な生産」である災害と（産業的あるいはその他の）突然変異に開いていく時だろう。もしアリストテレスが言うように「偶然性が実体を開示する」なら、「実体」の発明はまた「偶然性」の発明でもある。このように見るならば、難破は船の未来主義的発明であり、墜落は超音速飛行機の発明であり、チェルノブイリの溶解は原子力発電所の発明なのである。

——ポール・ヴィリリオ

「実体」の発明が「偶然性」の発明であるとするなら、「難破は船の未来主義的発明であり、墜落は超音速飛行機の発明であり、チェルノブイリの溶解は原子力発電所の発明」なのであり、福島の前心容融（メルツダウ）もまた同じことだといえる。

皮肉を弄して事態を茶化しているわけではないが、これが科学とテクノロジーがひょっとした偶然でもたらす現実なのだ。そしてこの現実を私たちはどう受け止めればいいのか、というのが次の問題となる。

このことにヒントを与えてくれる文章が2つある。一つは中井久夫の「戦争から、神戸から」いま一つは、廣瀬純「原発から蜂起へ」。

2

戦中派である中井は戦争を振り返ってある比喩を使ってこの事態を語る。中井は阪神淡路大震災のとき精神科医として獅子奮迅の活躍をした人だ。かれは、まず阪神大震災と東日本大震災との違いについて考える。ほとんど、誰でも考えることだが、二つの災害には環境的に共通点と異なる点がある。表にすると

環境	東日本大震災	阪神淡路大震災
大地	大地震	大地震
海	津波	(生き埋め、火災)
産業災害	原発事故	(アスベスト被害)

のようになるが、実際のところ神戸では津波と原発事故に相当するものがなかったといってもよいだろう。そうするとこの特異な津波と原発事故を加えた東日本大震災は阪神大震災を更に上回った大災害であったことになる。

そこで中井は戦争の比喩でこれを語る。

そもそも、日本は戦艦の大きさ云々ではなく、人口も含めた軍事力の面で、欧米に明ら

かに劣っていたのである。そう考えると、「こうあってほしい」という願望は、「そうあるはずのない」不可能な想定に基づいていたと言える。

今度の地震の場合は、防潮堤の高さが津波に対して低かったと言うけれども、ギネスブックに載るような防潮堤だったのである。ただ、原子力発電所の件は——私か原子力を批評するのは、お笑い草だけれども——どうも最初の取り組みがもたもたしていたことは事実らしいと聞くので、想定が甘かったことは確かだろう。最初のあたりで状況を甘く見たという点では太平洋戦争の初期に似ているかもしれない。太平洋戦争の初期は、次々に勝っていったけれども、それは植民地軍に勝っていただけで、結果的に本国軍に破れていくことになる。

希望的観測に、主脳部が半ば巻き込まれていたという点でも、原発の問題は似ているかもしれない。そのうち破綻することはわかっているけれども、「それでもやる」という思いで原子力発電に取り組んだのではなかったのだろう。問題を先送りにするというのは別に日本の専売特許ではなく、人間誰しもあるのかもしれないし、チェルノブイリはロシアのことだからと思って、甘く見ていたのだろう。私もチェルノブイリに近いものが日本で起こるとまでは考えていなかった。

（ 中井久夫「戦争から、神戸から」 ）

戦争中、「そうあるはずのない」不可能な想定に基づいて欧米に劣る軍艦をつくっても体当たりしていったのは「こうあってほしい」という願望によったのだろう。それと同じように原子力発電所の場合も「事故が起こるはずはない」という不可能な想定のもとに運転を続けたのは、経済効率を優先し、「こうあってほしい」という願望だけによって突っ走った現実が問題だったのだ。中井が指摘するように「太平洋戦争の初期は、次々に勝っていったけれども、それは植民地軍に勝っていただけで、結果的に本国軍に破れていく」ことになった。

戦後処理が極めて複雑な社会的・政治的な復興の道筋をたどったように、震災、津波、原発事故後の社会もまた、難問の山積みで、この見通しをを快刀乱麻に示してくれる誰かはいないか、とつい他力本願の弱音をはいてしまいそうだ。

産業リスクの根源からの暴発にいたって初めて日本人は夢から醒める。チェルノ



ブイリはロシアのことだから日本で起こるはずはない——しかしそれは希望的観測だ。高祖が指摘していたように＜福島＞という先駆的形象はやって来た。そしてこの問題は果たして＜解決＞しうる問題なのか？という難問に日本人はつきあわせられる結果になった。この辺の理不尽さ、不条理さを解く鍵を廣瀬純の「原発から蜂起へ」は示唆してくれる。

火力発電や、水力発電では石油の消尽、水力の落下という解決方法でエネルギーを取り出せるが、この解決方法は環境に甚大な被害は与えない。周囲が火災を起こしたり、津波が起こったりするわけではない。しかし原子力の核分裂が制御できない範囲になってしまう——メルトダウン炉心溶融して放射能の漏出を抑えられなくなり、原子炉が爆発



して放射能がとめどなく飛散してしまうレベル、危険度レベル（国際原子力事象評価尺度 INES）7に至ってしまえば、火力発電や水力発電の局地的、一過的な事故とは比べものにならない被害を日本の国土、世界の国土に与えてしまうことになる。チェルノブイリがレベル7、福島も同じだが、チェルノブイリ以上だとされ、一時の油断もすることなく、核燃料棒の冷却と核廃棄物の地下深くへの埋葬を何万年となく行わなければならない事態となっている。

.....

IN E S	レベル	7	深刻な事態	チェルノブイリ、福島
	レベル	6	大事故	
	レベル	5	事業所外へのリスクを伴う事故	スリーマイルズ

.....

水が過冷却によっても凍らない時、外部からのささやかなきっかけによって一挙に氷結する時がある。それは斜面で積雪が安定しているように見えてなにかのきっかけで一挙に雪崩を起こして崩落するのと同じである。この時、過冷却していても凍らない状態を「**準安定**」の状態と呼ぶ。目の前で凍らないでいるように見えて（**現勢的**な現実）いても、実は**潜勢的**には過冷却という問題状態になっている場合、この**問題の解決**というのは外部からのちょっとしたきっかけによる氷結という事態である。或いは静止した積雪の突然の崩落である。このことによって大きな被害が環境に及ばないのであれば、これが問題の「解決」ということになる。地震も津波もこれと同じような地殻の、あるいは、ねじれて際立った波（自然）の問題解決ではあるが、しかし環境、人間社会に及ぼす影響は被害甚大である。被害甚大の解決が起こらないように制御できればよいのだが、自然をそこまで制御することは人間にはできないから、予知情報を流し、避難する方法を、たくましくしていくしか、いまのところ手立てはない。

これが核分裂を元に原子力のエネルギーを利用する、原子力発電にいたって、その発電

システムが壊れて炉心溶融をおこし、爆発、放射能を拡散してしまえば、原子爆弾と変わらないことになってしまう。そういうシステムが壊れた時（今回の福島の場合）爆発、放射能の拡散を防ぐため、ひたすら核分裂が連鎖的に起こらないように「制御」するしかない。もともと「原子炉」というのは、この核分裂反応を安定的に制御する装置なのだが、何らかの些細なきっかけで核爆発を起こしてその不安定な状態を「解決」してしまっただけはその被害は甚大なことになる。現代の原子炉では核爆発は起こらず、水素爆発、水蒸気爆発までとされているが、雪崩や、火災事故とはわけが違うのだ。

そこで採られる対策は**問題の「解決」**ではない。あくまで**問題の「制御」**が基本になる。それ故、壊れた原子炉に対する対応は実に優柔不断になってしまう。従来の解決方法は何の役にもたたない。ただひたすら怪物が怒らないように、なだめすかしてその潜勢力を発揮できないように埋葬するしか仕方がないのである。すなわち、問題を解決するのではなく、ひたすら制御することが要請される。

原発事故は氷結や雪崩のように（あるいは地震や津波のように）準安定状態の解決として「起きた」のではなく、過冷却水や斜面上の積雪のように準安定状態それ自体の持続として「起きている」。計測可能な範囲において不安定から安定へと漸進的に向かっているというのが仮に本当だとしても、原発事故の本質はそこにはなく、そうした現勢的現実の傍らにポテンシャル・エネルギーの過飽和がつねに維持されるということにこそ、すなわち、相転移が連続的な解として産出される傍らで問題が未解決のままにとどまり続けるという過剰にこそ存する。原発事故は準安定から準安定へと推移し続ける運動として「起きている」。

（ 廣瀬純の「原発から蜂起へ」 ）

こういった認識からは、従来型の「問題解決社会」だけでは事柄は処理されないことがわかってくる。すなわち、これからは「問題制御社会」への観点が取り入れられなければならないのだ。

原子力への電力政策の転換は、問題解決に立脚した統治モデルから問題制御に立脚した統治モデルへの移行というより大きな物語のなかに書き込まれるべき出来事だと言えるだろう。たとえば、米軍によるオサマ・ビン＝ラディンの射殺によっても終止符が打たれたとは些かも言えないことを米政府自身はつきりと公言している「テロとの戦い」が原発事故あるいは原子力発電それ自体と同時代的であるのは、両者がともに問題制御に立脚した統治モデルの枠組みのなかにあるからだ。「テロとの戦い」で目指されるのは、誰もが知る通り、「テロリズム」なるものの根絶すなわち解決などではまるきりなく、あくまでも、「テロリズム」なる問題をその過剰な解決不可能性において維持すること、また、それによって準安定から準安定への連続的な運動のもとに社会全体を包摂することである。

（ 同 ）

「テロとの戦い」においては、悲観的ではあるが、テロを根絶することはできない。

テロが起きないように「制御」していくしかないのだ。原子力の電力政策に関しても同じことが言える。両者ともに問題制御型の問題だからだ。



さてここにいたって廣瀬は「革命」と「蜂起」に言及する。

ドゥルーズは言う「最も過酷なのはどの体制か、最も寛容なのはどの体制かなどと問うには及ばない。どの体制においても解放と隷属との対峙は等しくみられるのだから。」問題解決は規律訓練社会においてたんに支配や統治のモデルだっただけではなく解放のモデルでもあった。解放としての問題解決の最たる例は言うまでもなく革命だ。革命とは問題を解決すること、共有された解を実現することに他ならない。同じことは制御社会についても言われなければならない。問題制御としての解放、問題をその過剰において共有することによる解放とは何か。蜂起である。

(同)

問題解決の最たる例は**革命**であり、問題制御としての解放の例は**蜂起**であると廣瀬は考える。革命は解決を与えるから、疲労が蓄積していても一挙に晴れる。しかし、蜂起には解決がなく、制御があるばかりだから疲労は持続する。解放の喜びと疲労がない合わされながら続いていくのが蜂起だ。こういった蜂起の裂け目に生きることが現代の生き方であるかのように廣瀬は言っているが、果たしてそんな不完全燃焼のような生き方に持続的な喜びなどというものがあろうのであろうか？

なるほど、我々は、前世代より、より忍耐強く、より寛容な生き方を選択しなければならないかもしれないが、持続的な小爆発を繰り返すことが必ずしも幸福を意味するとは考えにくい。3. 1 1 的思考というものは何と疲れる思考である事か！

2015. 1. 20

イスラム国、日本人人質事件



1 誘拐事件

1月20日、午後2時45分（日本時間）インターネット上にイスラム国とみられる過激派からの警告ビデオが放映された。それによると、中東歴訪中に安倍首相がイスラム国対策として避難民に食料、医療の提

供のために2億ドルの支援を行う、とした声明に反発して、「日本は進んで十字軍に参加し、われらの女性、子どもを殺害するために1億ドル、イスラム戦士と戦う背教者を養成するために1億ドルを提供した。よって人質2人分2億ドルを72時間以内に支払え、さもなければ人質を殺害する」といった内容の警告・脅迫を行った。

人質はオレンジの衣服を着せられてひざまづき、黒覆面の男がナイフを、ちらつかせながら、日本の政府と国民あてのメッセージを伝えるという映像だった。

一人は民間軍事会社PMCの経営責任者、湯川遥菜さん（42歳、昨年8月シリア、アレppoで拘束）。もう一人はフリージャーナリスト後藤健二さん（47歳、昨年10月トルコからシリアに入り、マレアからアレppoに行き、そのあたりで拘束か）。

1月23日午後2時45分を過ぎても、交渉がうまくいったという情報は入ってこなかった。2人の安否は不明のまま夕闇が深くなっていった。

2 過激派の系譜

本来のイスラム教の「**ジハード**（聖戦）」の基準は

- ① 暴力は敵の力に見合ったもので、撃退するに十分な規模のものでなければならない。
- ② 無実の市民はジハードの対象とならない。
- ③ ジハードは国家の長、支配者によって宣言されなければならない。
- ④ ジハードの倫理基準
 - ・ 非戦闘員、婦女子、老人は殺してはならない。
 - ・ 降伏した者を処刑すること、捕虜を傷つけること、他人の財産を破壊することは禁じられている。

といったものだが、イスラム過激派の行動は平信徒による宣言や、無差別殺傷の自爆テロ

など、これらの正統的・古典的基準から外れている。

宮田律の「現代イスラム過激派とテロリズム」から過激派の系譜を概観してみよう。

①イブン・タイミーヤ（1268～1328）

1258年モンゴルによるイスラム帝国アッバース朝バグダッドの征服は当時のイスラム教徒にこの上ない屈辱を与えた。タイミーヤはムハンマドがメディナに築いたコミュニティをムスリムの理想と考え、コーラン、スンナ(ムハンマドの慣行)、初期のムスリム共同体の範



例を厳格に守ることを訴えた。更にモンゴル人

たちを背教者、聖戦の対象としてジハードを行うべきであると説いた。また、腐敗した為政者たちに従わないことを正当化し、これらの考えが現代の過激派の源流となった。

②ムハンマド・イブン・アブドゥル・ワッハーブ（1703～1791）タイミーヤを師と仰ぎ、通俗的な信仰と慣行を「偶像崇拜」「ジャーヒリーヤ」とみなし、聖典への回帰を唱え、偶像崇拜の対象となっている聖廟や墓石などの破壊を行った。

③アブドゥル・アズィーズ・イブン・サウード（1880～1953）ワッハーブ派の運動を普及させ、それがサウジアラビア（サウード家の国）の王族に継承されていく。

④サイイド・クトゥブ（1906～1966）エジプトの抑圧的なナセル政権下で、暴力に訴えるジハード論を提唱。漸進的な改革は無意味であり、逸脱した政権、欧米・ソ連などの植民地主義には直ちに反撃することが、ムスリムの義務であり、正しいとした。

⑤ムハンマド・アル・ファラジュ（1953～1982）ジハード団ノイデオログであり、エジプトのサダト大統領暗殺事件に連座して処刑された。イスラム国家の建設のためには西洋の法の根絶、イスラム法の履行、世俗的な政府を武力で倒すことが必要である、と訴えた。ウサーマ・ビンラディンなどに影響を与える。

⑥ウサーマ・ビンラディン（1957～2011）1998年ユダヤ人、十字軍にジハードを行う「世界イスラム戦線」を結成。サウジアラビア王政の打倒、パレスチナ、チェチェン、カシミール、イラクでムスリムを虐殺しているアメリカとその同盟国に対して報復する正当な権利があるとした。この動きのなかから2001年の「9.11」米国攻撃が生まれた。

続いて、こうした過激派を生み出す土壌、世界経済のあり方について見ておこう。

3 過激派を生み出す土壌

1990年代には過激派のテロ事件はそれほど多くなかった。1998年ケニア・タン

ザニア米大使館爆破事件などは、1991年湾岸戦争、イラク戦争などで米軍がサウジアラビアなどに駐留し続けたことに起因している。

2000年代に入ると2001年にはアメリカ貿易センタービルの襲撃テロ事件が起こり、それに連動してアメリカの反撃、核兵器開発疑惑を名目に2003年イラク戦争が勃発、フセイン政権は倒れた。

イスラム世界では異教徒の軍事的な介入に強い反発を抱く。「ダール・アル・イスラム（平和の家）」に対する「ダール・アル・ハルブ（戦争の家）」からの侵略と理解して、それに攻撃を加える。そのよい例が「対テロ戦争」協力国、オーストラリアやスペイン、イギリスで起きたテロ事件だ。

- 2002年10月 インドネシア・バリ島でのオーストラリア人のよく来る
ナイトクラブの爆破
- 2004年 インドネシア・ジャカルタ オーストラリア大使館へのテロ
攻撃
- 3月 スペイン・マドリードでの同時多発テロ
- 2005年 7月 英国・ロンドン地下鉄爆破事件
- 10月 インドネシア・ジャワ島で同時多発テロ

2005年の英国ロンドン地下鉄爆破事件は私の記憶によく残っている。というのもその時、丁度私はヨーロッパ3ヶ国（ドイツ、フランス、スイス）旅行の途上にあって、大阪の女子大生たちがケンブリッジに短期留学に行く飛行機に乗り合わせていたからだ。最初にドイツに行くのにロンドン経由であったために同道したことになるのだが、彼女たちが短期留学への夢を膨らましているのを聞いてうらやましくも感じていた。しかし、そのロンドンが異常な緊張に包まれているというのを聞いて驚いたものだ。その時テロ事件の真っ最中であった。彼女たちは留学どころか、危険地域への入国を学校から差し止められて、結局留学体験をすることができなくなる羽目に陥った。私といえばドイツのフランクフルトに飛び立ちその日ヨーロッパ旅行の初日を迎えようとしていた。7日間のヨーロッパ旅行は実に快適であったし、大陸側には危険情報は入ってこなかった。だから、ゆったりとシュバルツバルトや白亜のノイシュバンシュタインを見学してきた。しかし、いま振り返ってみると実際には水面下で危険な兆候は様々にあったに違いない。それでも私はといえば、ユングフラウの優雅な姿や、リュクサンブール公園の林の間を感慨にふけて散歩していたのだった・・・

話がずれてしまったが、インドネシアでのオーストラリアに対するテロ事件がバリ島で起こったのには驚いた。バリ島といえば神秘の島、舞踏の島として人類学的、観光的に有名な場所だが、そのバリ当まで危ういのか、という感じであった。そもそも世界15億のイスラム教徒の人口の2/3がアジア・太平洋地域にあるという事実さえ知らない能天気

な私であったのだから無理もない。

話はずれてしまったが、とにかくアメリカの2001年9.11事件以来「テロとの戦い」は急激にアップテンポとなり、21世紀は「テロとの戦争」時代に化してしまった。このころイスラム過激派のテロといえば、ウサーマ・ビンラディンを中心にするアルカイダが有名だが、過激派というのはそれだけに一元化できない。

ロシアとの対抗でチェチェンでの爆破テロ事件（例：北オセチア共和国ベスランでの小学校占拠事件） 中国との対抗でウイグル族支援の自爆テロ、イスラエルとの対抗でハマス、イスラム聖戦派などによるテロ、英国との対抗で2005年ロンドン地下鉄爆破事件などのように対イスラエル問題、各民族問題を中心とするテロ、ヨーロッパ社会に適応できないムスリムによるテロ、などもあって事態は、複雑化している。

ただ、過激なテロリズムが結集し始めたのはアフガニスタンでのソ連軍との戦い後、エジプトのクトゥブの「暴力による聖戦」思想の影響を受けて、エジプトからアフガニスタンに逃げてきた戦士、イデオログが過激派を養成し、それが拡散していったということは確かなようだ。

総括的に言えば、過激派の土壌となっているのは、人口増加著しいイスラム社会の若者に確かな職業的保証はなく、都市にあっては貧困層を形成せざるをえないこと、中東の各国の為政者たちは世俗権力に成り下がっており、抑圧的な政治しか行わないこと、グローバル経済の影響でトルコやアルジェリアなどでは、通貨切り下げ、国営企業の民営化などが行われ、インフレ、失業率の上昇などが起こって、貧困国を更なる経済的重圧下に置いたことなどが影響している。

こうして、欧米国家との格差、国内での階級格差、移民二世の疎外状態などが、若者たちにその救いを過激なジハードに求めざるを得ないように追い込んでいったということも、テロが止む気配を見せない理由であろう。

4 国家は・・・

国家についてスピノザが述べたことをここに掲げておこう。

■ 国家は罪を犯す

人々はこう問うのが常である。最高権力は法に拘束されるかどうか、したがってまたそれは罪を犯しうるかどうか、と。だが、法ならびに罪という言葉は、国家の法に関するばかりでなく、あらゆる自然物に普遍の規則、とりわけ理性の普遍的規則にも関するものが常であるから、国家が何の法にも拘束されない、すなわち罪を犯しえないと一概には言えない。なぜなら、それがなくては国家が国家として存在しない諸法則あるいは諸規則に国家が少しも拘束されないとすれば、その場合国家は自然物としてではなく、架空物（キマイ

ラ) として見られなければならぬからである。ゆえに国家は、自己の破滅の原因となりうるようなことどもを自らなし、あるいは他からなされる時に罪を犯しているのである。そしてこういう場合我々は、哲学者あるいは医学者が自然は罪を犯すと言うのと同じ意味において、国家が罪を犯すと言うのである。

(中略)

ゆえに、国家が自己の権利のもとにあるためには恐怖と尊敬との原因を保持するように拘束される。そうでなければ国家はもはや国家でない。思うに、統治権を握る人あるいは人々にとっては、酔って、裸で、遊女とともに町を歩き回ったり、俳優のまねをしたり、自らの定めた法律をあからさまに破ったり軽蔑したりして、それでいて威厳を保持することは不可能である。あたかも、存在すると同時に存在しないということが不可能であると同様に。さらに臣民を虐殺したり、掠奪したり、処女を誘惑したり、その他これと同様のことどもは、恐怖を憤激に変え、したがって国家状態を敵対状態に変える。

(スピノザ「国家論」第四章、第四節 畠中尚志 訳)

国家が国家として存在しない諸法則に少しも拘束されないとすれば、その場合国家は自然物としてではなく、架空物（キマイラ）であり、自己の破滅の原因をつくる国家は自然が罪を犯すのと同様に罪を犯していることになる。こうして国家は破滅していく。そもそも国家は何のためにあるのか？

■ 国家は自由のためにある



〔六〕 これまでに解明してきた国家体制の基礎からはっきり分かるように、国というものの究極の目的は、ひとを支配することでもなければ、ひとびとを恐れによって縛りつけ、他人の権利の下におくことでもない。むしろ反対に、国は彼らを恐れから解放するためにある。一人一人の人間ができる限り安全に暮らせるように、つまり彼らが自然に持っている存

在し活動する権利を、自分自身や他人に害を及ぼさない限りで最高度に確保できるようにする。それが国というものなのだ。

しつこいようだが、国とは人間を理性的存在から野獣や自動人形におとしめるためにあるのではない。むしろ反対に、ひとびとの心と体とそのさまざまな機能を確実に発揮して、彼らが自由な理性を行使できるようになるために、そして憎しみや怒りや騙し合いのために争ったり、敵意をつのらせ合ったりしないためにある。だとすると、国というものは、実は自由のためにあるのである。

(スピノザ「神学・政治論」第20章〔6〕 吉田量彦 訳)

国家は人びとを恐怖から守り、安全に暮らせることを保証するためにある。なかでも国家は「人間を理性的存在から野獣や自動人形におとしめるためにあるのではない」むしろ、「憎しみや怒りや騙し合いのために争ったり、敵意をつのらせ合ったりしないためにある。」すなわち国家は人びとの自由のためにある。

こういった考え方をここに掲げるだけで、今の世界の国家は、或いは国家と称しているものがいかに罪深く病んでおり、国家の名に値しないものであるかがわかるだろう。

1月23日 白鵬、大鵬を超えて33回目の優勝。35回ものシュートを打ちながら一点しかとれなかった男子日本サッカー。世界選手権スノボ・パラレル大回転で初めてメダル（銅）をとった竹内智香。

壮士ひとたび去って復た還らず

2015. 1. 23

イスラム国、日本人人質事件（２）



1

23日の交渉時間切れの後、24日の夜インターネット上に湯川さんを殺害したとみられる写真を持つ後藤さんの画像と、その音声メッセージが掲載された。内容は湯川さんの殺害、要求は身代金から捕虜の交換（2005年のヨルダンテロ事件にかかわって死刑囚としてヨルダンに収監されているサジダ・リシャウィの釈放と後藤さんとの交換）へと方針転換したこと、このことを飲まなければ後藤さんの命はない、などということが語られている。実はネット上に公開される前にこの内容は後藤さんの母親に届いていた。

ヨルダンはテロへの戦いの有志連合としてイスラム国と戦闘を交わしており、昨年12月の戦闘ではヨルダンの空軍パイロットが打ち落とされ捕虜として収監されており、既にサジダ・リシャウィとの捕虜交換話が取りざたされていた。ヨルダン側の意向としては自国民の捕虜との交換が優先されるというのが政府、一般市民の考えであり、外国人の後藤さんが優先されることはないというのが通説となっている

26日には、ヨルダン下院のバッサム・マナシール、ヨルダン日本友好議員連盟会長アリ・バタニアは空軍パイロット・カサスベ中尉と後藤さんとのセットでサジダ・リシャウィとの交換はありうることを示唆した。しかし、その際イスラム国側は他の囚人釈放や高い身代金を求めてくる可能性もあるとも指摘した。また、地元紙ヨルダンタイムスは、イスラム国はサジダ・リシャウィ以外に今一人ジャド・カルボリ死刑囚の釈放も求めてくる可能性がある、と報じた。

しかし、27日の夜になって第3番目の音声付画像がネット上に公開された。それによると残り時間は24時間（28日中）、そのうちにサジダ・リシャウィと後藤さんを交換しなければ、先に空軍パイロットを処刑し、後藤さんもそれに続くという脅迫になっている。つまり、サジダ・リシャウィと空軍パイロットの交換は今回はなく、後藤さんとの交換を拒むなら兩人とも殺害する、という内容になっている。

囚われの報の後、日本の様々なイスラム教団体が、解放のためのお祈りを捧げてくれた。日本最大級のモスク・東京ジャーミイはイスラム国はテロ組織、イスラム教は暴力を認めない、と呼びかけた。また、日本ムスリム協会はホームページで無実の人を殺害することは許されない、コーランでは「人を殺した者、地上で悪を働いたという理由もなく人を殺すものは、全人類を殺したのと同じである」と戒めていると、注意を促した。イスラミッ

クセンター・ジャパンではフェイスブックで人質の即時解放を要求する抗議声明を出した。

ニューヨークでは映像プロデューサー西前拓さんの始めた“I AM KENJI”というメッセージを胸に掲げる行為が既にネット上に1000人にも広がっているという。更にツイッター、フェイスブックも合わせると世界中で2万5千もの数に達した。先日のフランス・テロ事件抗議の“Je suis Charlie”が瞬く間に全世界に広がったように、マルチチュード＜共＞が立ち上がってきている姿と受け取ってもいいだろう。

2

交渉は次第に食い違いを深めていき、期限を切られていた日本時間28日夜（11：30）までの回答について、ヨルダン政府は女死刑囚サジダ・リシャウィとの交換はあくまで空軍パイロットとの交換が優先されるのであって、後藤さんとののではないと突っぱねた。その結果29日未明（日本時間午前）第4のメッセージが文字と音声のみで発表された。

それによると、イスラム国側はあくまで後藤さんとサジダ・リシャウィとの交換であり、29日の日没まで（4：30、日本時間午後11：30）にリシャウィをトルコの国境線まで連れてくること、そうでなければヨルダンの空軍パイロット、モアズ・カスサベは即時に殺害される、といった内容だった。ヨルダンでは空軍パイロットの解放のためのデモ、国王直訴の行動が起こっており、結局空軍パイロットの無事な姿を見せたなら、リシャウィをトルコ国境に運ぶという返答を返したが、それに対してイスラム国側からの反応が何もないため、ヨルダンは期限の一時間前にリシャウィ死刑囚はまだ、ヨルダン国内におり、トルコの国境にはいないと公表した。以前イスラム国と欧州や、トルコとの人質交換を行ったことのある、トルコの国境の町アクチャカルでは大勢の各国の報道陣が詰め掛けていたが、結局29日には肩透かしをくらって日没が過ぎても何事も起こらなかった。この状況は執筆中の私の今（30日午後4時）でも変わっていない。人質はどうなってしまったのか、交渉は続けられているのかたいへん気にかかることではある。とかくしているうちに、2月を迎え結末がやって来た。

2月1日（日）日本時間午前5時頃、ネット上に後藤さん殺害の様子とイスラム国のジハーディ・ジョンによる強い口調のメッセージが載せられた。内容的には日本政府を強く非難し、今後容赦なく日本人を血祭りにあげていくというメッセージだった。この映像は昨日のシリア時間10時頃掲載されたものであろう。映像撮影の場所はラッカ北方、トルコ国境アクチャカルの南方のアルフォタではないかと言われている。殺害は必ずしも昨日1月31日ではなく予告期限が切れた翌日の30日であったかもしれない。



わかりにくいので推移を表にしておく。

	日にち	日本時間	ネット媒体	内容	期限
1	20日	2:50	映像・音声	〔オレンジの服を着せられた後藤・湯川さん〕 後藤・湯川両人の身代金として2億ドル要求。	72時間 23日2:50
2	24日	夜	画像・音声	〔湯川さんの殺害死体の写真を持っている後藤さん〕 死刑囚サジダ・リシャウィと後藤さんとの交換	
3	27日	夜	画像・音声	〔パイロットの写真を持っている後藤さん〕 死刑囚サジダ・リシャウィと後藤さんとの交換	24時間 28日夜
4	29日	午前	文字・音声	死刑囚サジダ・リシャウィと後藤さんとの交換 リシャウィをトルコの国境線に連れてくること	日没までに 29日夜
5	2月1日	午前	映像・音声	後藤さん殺害の様子とイスラム国のジハーディ・ジョンによる強い口調のメッセージ	

3

イスラム国の成立について確認のため Wikipedia を参考にして少しまとめてみる。

国の前身は **2000 年**ごろ、**ザルカーウィー**がヨルダンで築いた **JTJ**（タウヒーとジハード集団）にある。この組織はアフガン戦争後イラクに接近し、**2003 年**イラク戦争時にはイラク国内で様々なテロ活動を行った。**2004 年**にアルカイダと接近し、合流して「イラクの聖戦アルカイダ組織」と名称を改めた。

2006 年 スンニ派の武装組織と合流し、解散後他組織と統合して、「イラク・イスラム国」と改称。この年ザルカーウィーは殺害された。

2009 年 イラク・バグダードで自爆テロを決行、282 人が死亡。指導者はバグダーディ

2012 年 イラク・バグダード・他で連続爆破事件を起こし、52 人が死亡。

2013 年 4 月ヌスラ戦線と合併して名称を「イラクとシャームのイスラム国」(略称: ISIS

・・・Islamic State of Iraq and Sham) とすると宣言。(別称: 「イラクとレバントの
イスラム国」(略称: ISIL・・・Islamic State in Iraq and the Levant))

[註] **シャーム**: 大シリア (トルコ、シリア、エジプト、パレスチナ、ヨルダン、
レバノン) のこと。或いはダマスカスを示すこともある。

レバント: 地中海東岸地方 (シリア、レバノン、イスラエル、ヨルダン)

7 月アブグレイブ刑務所、バグダード近郊の刑務所を襲撃 500 人もの受刑者が脱獄。

2014 年

2 月 アルカイダ「イラクとシャームのイスラム国」と断交。残虐性を敬遠か。

6 月 モスル制圧、トルコ領事館員ら 48 人を誘拐。

6 月 29 日 **バグダーディ**をカリフとして、名称を ISIS から「イスラム国
(Islamic State)」へと改称。イスラム国家樹立宣言をした。

8 月 ラッカ制圧、シリアの捕虜 160 名を処刑。

ドイツ、クルドへ支援。

日本人、湯川さん拘束される。

9 月 アメリカを中心とした有志連合がシリア国内での空爆を開始。

10 月 日本人、後藤さん拘束される。

11 月 イスラム国攻撃に消極的なアメリカのヘーゲル国防長官辞任の予定。

12 月 ヨルダン空軍パイロット捕獲される。

2015 年

1 月 20 日 ネット上で、湯川さん、後藤さんを人質として身代金 2 億ドルを要求。

1 月 24 日 湯川さん殺害写真掲載、ヨルダンに収監されているリシャウィ死刑囚と
後藤さんとの人質交換を要求

リビア・トリポリで政府高官、外交団の利用するホテルが襲撃され、8 人
が死亡。犯行はイスラム国に忠誠を誓うリビア東部の過激派組織による。

1 月 28 日 人質交換のためリシャウィ死刑囚をトルコ国境に連れて来ることを要求

1 月 29 日 エジプト・アリョーシユの軍・警察の施設十数箇所で襲撃があり、関係者
26 人死亡。犯行はイスラム国に忠誠を誓うシナイ半島の武装組織。

1 月 30 日 パキスタン・シーア派のモスクで大規模な爆発、犯行はイスラム国を支持

というべきか・・・



このような事態の中、難民の生活、貧しいもの、こども達の実態を世界に知ってもらおうと自分の命をも顧みることなく取材に回った後藤さんの行動とメッセージの意味はあまりにも大きいものがある。モスクで祈ってくれたみなさん、“I AM KENJI”をかかげてくださった皆さんに深い共感をおぼえる。各国首脳の哀悼の意など、空々しいものは通り越して愛と善を希求する本当のこころこそが、いま、われわれのこころに希望を与えてくれる。

剣におごるものはやがて剣に滅びる

2015. 2. 1

“Let it be” から “Let it go” へ



1

昨年、アニメ「アナと雪の女王」がブレイクし、その主題歌“Let it go”も大ヒットした。

＜ありのままで＞というのが合言葉となり、リクルートスーツを着て受験前にこの言葉をまじないのごとく唱えるのがはやりたり

した。時代は“be”から“go”へ動いたのだろうか？

アンデルセンの原話「雪の女王」では雪の女王は少女ゲルダから幼な友達の少年カイを取り上げ雪の王宮に閉じ込めてしまう悪者である。それに対して「アナと雪の女王」ではアナの姉である雪の女王エルサが主人公で、けっして悪者ではなく、すべてを氷にしてしまう自分の力に絶望して北に氷の王宮をつくって閉じこもってしまう女性として描かれている。そして登場するアナにプロポーズする王子様、ハンスは実はアナの王国を乗っ取ろうとする冷酷な男であり、姉エルサ救出に向かうアナを助ける山男クリストフはふぬけである。このディズニー映画で男は珍しく女性のピンチを救う主人公にならず、このアニメで描かれているのは、むしろ姉妹愛（同性愛）である。そういうわけで男女のカップルが見に来ると男の方はさえない表情で帰っていき、お母さんと子どもたちで見に来たグループではみんな意気揚々と引き揚げていくという報告はあながち嘘ではなさそうだ。

というわけで主人公は雪の女王エルサであり、彼女が隠し持つ氷の魔法の力を抑圧して生きることをやめて「ありのままに」生きようとする決断と解放が歌われているのが、主題歌“Let it go”であり、しかもこのテーマソングはエルサが自分の力をありのままに信じるシーン、映画の真ん中に出てくる。この場面に来ると観客はいつせいに“Let it go”と唱和し始めるそうだ。（以下“Let it go”歌メンゼル、歌詞 K.Anderson-Lopez Robert Lopez）

Don't let them in,
don't let them see
Be the good girl you always have to be
Conceal, don't feel,
don't let them know
Well now they know

誰も入れてはだめ
誰にも見せてはだめ

いい子でいなくちゃだめなの
隠さなくちゃ、感情さえも
気づかれてはだめ
でももう、彼らは知ってしまった （訳はネット訳）

このように、いい子でなくちゃいけない（Be the good girl you always have to be）それを知られちゃいけない（Don't let them in, don't let them see）といところから開き直る。

Let it go, let it go
Can't hold it back anymore

もういいの、ありのまま
これ以上我慢なんて出来ない



自分の抑圧していたものを一気に振り切って叫ぶ（Let it go, let it go）

Let it go, let it go
Turn away and slam the door
I don't care
what they're going to say
Let the storm rage on.
The cold never bothered me anyway

もういいの、ありのまま
背を向けてドアを思いっきり閉めて
気にしないの
彼らが何を言おうと
嵐よ吹き荒れなさい
とにかくもう気にしないの
（中略）

It's time to see what I can do
To test the limits and break through
No right, no wrong, no rules for me,
I'm free!

今がその時 私の力を知り

限界を試して それを超えるの

正しいことも、間違ったことも、ルールもないわ 私は自由よ！

Let it go, let it go

こうして決断の時がやって来る (It's time to see what I can do) そして私は自由になる

(To test the limits and break through No right, no wrong, no rules for me, I'm free!)

2

なるほど、この“Let it go”は力強く、すがすがしい歌だ。
永くビートルズの“Let it be”
に慣れてきた耳からすると、新しい時代が来たかのような違いを感じる。



Let It Be

– The Beatles

When I find myself

in times of trouble

Mother Mary comes to me

Speaking words of wisdom,

let it be

自分が困難なとき

マリーが現れて

癒しの言葉を語りかける

あるがままにしておきなさい

ビートルズの“Let it be”においては決断して、外に出て行くというよりは、傷ついて困難な目にあっているときには Let it be だ、と癒しの時間に任せることを説いているといった風情なのだ。

And in my hour of darkness

She is standing right

in front of me

Speaking words of wisdom,
let it be

そして暗黒のとき
彼女はちょうど
僕の前に立って
癒しの言葉を語りかける
あるがままにしておきなさい

Let it be, let it be
Let it be, let it be
Whisper words of wisdom
Let it be

あるがままに、あるがままに
あるがままに、あるがままに
癒しの深い言葉をささやく
あるがままにしておきなさい

ここでは、抑圧から逃れていく決断の時を歌うことではなく、癒しの時を待つ格別抗うことのない柔軟さが賢明なのだと歌われている。それが Go と Be との違いだ。Go は閉じこもりから出て行き、抑圧的な自分から訣別することを歌っているのだが、Be は様々な困難の中でしばらく閉じこもって、癒しの時を待つことを歌っている。社会学的な脱出のさわやかさと、存在論的・宗教的な癒しの優しさとの対照が際立つ。どちらもいい歌だ。また時の流れをみごとにとらえてもいる。時の断面の鮮やかさにふと突き動かされて、一文を記す。

2015. 1. 26

<付記>

- ・ 今年の正月のテレビのバラエティ番組で、つまらない出し物の途中、ローラのCGを駆使した“Let it go”の熱唱と、パフォーマンスはすばらしかった。憎まれがちな彼女の評価はすこしはあがったかな？
- ・ アンデルセンの原話「雪の女王」では少女ゲルダと少年カイは、身体はおおきくなくても、いつまでも幼な子のように、手をつなぎあっていた。“なんじら、もしおさなごのごとくならずば、天国に入ることをえじ”という聖書の言葉を実践していたらしい。

白鵬発言問題



1

平成27年の初場所13日目、白鵬は、希勢の里を破って千秋楽を待たずして大鵬を抜いて未踏の33回目の優勝を果たした。この一番は両者土俵際でもつれこみ、どちらが先に土がついたか判定の難しい勝負だった。軍配は白鵬に上がったが、物言いがついてとり直しとなり、結局白鵬が勝った。

私は偶然この取り直しの場面に丁度チャンネルを入れて、白鵬勝利を見たのだが、そのときアナウンサーが取り直しのことに触れたので、どんな取り組みだったのかな、と気軽に考えていたが、たまたま、その後のニュース番組でその場面を見た。白鵬が希勢の里を攻めて土俵際に追い詰めるが、後ろ向きに倒れる希勢の里のからだ、少し捻られて前つんのめりで倒れこむ白鵬のからだの着地とが殆ど同時であって、素人目には判定できない感じだった。25日の千秋楽を終えて、翌日26日の宮城野部屋で行われたお祝いの記者会見では、前夜の酒宴の酒が残っていたのか、審判団への異例の不満が口をついて出た。以下その一部分。

白鵬（1） 疑惑の相撲が1つあるんですよね。これは、いかがなものかと。13日目ですね。みなさん、知ってるでしょう。勝ってる相撲ですよ、1番目は。その時は分からなかったけど、帰ってビデオを見たけど。子供が見ても分かるような相撲なんでね。なぜ、取り直しになったのか。あの大鵬親方が、45連勝して勝った相撲が、負けになった。それからビデオ判定ができた。なのに、ビデオ判定は何をしたのか。本当に悲しい思いでした。ビデオ判定があれば、大鵬親方のあの負けもなかったかも。連勝記録も続いていたかも。もう少し緊張感をもってやってもらいたい。負けてたら（自分の）優勝記録が止まったかもしれない。勝てたから良かったけど。

白鵬（2） ビデオ判定の方も、元お相撲さんでしょう。取り直しの重みも一番分かっているはずじゃないの。簡単に取り直しと言うのはやめてくれと思いながら、その日夜、ビデオで見たんですよ。こんなの2度とないようにやってもらいたい。そう思ってやってみましたけど。本当に肌の色は関係ないんだよね。この土俵に上がって、まげ結ってることになれば日本の魂なんですよ。みんな同じ人間です。

白鵬（3） 13日目は苦労しました。（希勢の里と体が）重なって落ちましたから、よく分からなかった。13日目に決まったのも久しぶりで帰った後、ビデオを見た。悲しかった。盛り上がりどうこうじゃない。こっちは命を懸けてやってますからね。

「簡単に取り直しと言うのはやめてくれ」「こっちは命を懸けてやっていますからね」「勝ってる相撲ですよ、1 番目は。その時は分からなかったけど、帰ってビデオを見たけど。子供が見ても分かるような相撲なんでね。」と審判団を痛烈に批判している。この件で宮城野親方は、北の湖理事長、伊勢ヶ濱審判部長に謝罪し、白鵬本人も反省しているという。

2

審判団に白鵬が文句をつけたのはお門違いだろう。しかし問題はその底流に流れていることだ。白鵬の発言「本当に肌の色は関係ないんだよね。この土俵に上がって、まげ結つてことになるれば日本の魂なんですよ。みんな同じ人間です。」この部分だ。

横綱をすべてモンゴル出身者が独占している現状（朝青龍、白鵬、日馬富士、鶴竜）で日本人である稀勢の里にかかる期待は大きい。それ故、対稀勢の里戦での応援は白鵬よりも稀勢の里の方に熱い声援が送られる。周囲の視線も「偉大な横綱」であるにもかかわらず白鵬には微妙にやっかみなどが感じられるのであろう。

民族問題について少し考えてみよう。

「民族意識」を持つことは悪いことではない。丁度自己意識を持つことが認識の出発のようなものである。しかし自己主義＝利己主義を持つことは反面困った問題を生むだろう。それと同じように「民族主義」を強固に固執することも問題を起こす。

だが全民衆を動員し同一民族に結集していけば、自民族内の少数民族や境界を接する異民族との関係が「排除の力学」によって抑圧され、衝突の状況になる。強固な民族の自己同一性は、逆に強い排他意識になる。差異が差別に変わる。

インドとパキスタン、バングラデシュの例をみれば、強固な国家＝民族統一が、異質な少数の民族意識の反発をまねき、対抗民族が新たにひとつの宗教や言語に特定化されて創られることをインド亜大陸の場合は示している。民族支配が逆に新たにそれまで意識していなかった民族を生み出す。シオニズムによるユダヤ国家イスラエルの誕生がパレスチナ民族という集団意識を新たに創造し、ロシア人の大量の流人がカザフ民族やウズベク民族の意識をつくり出すのである。



民族は核連鎖反応のように次々と少数民族（エスニック・グループ）の意識をつくりだし、強固にしていく。民族が民族を生みだしていくのが、「民族の力学」である。レバノンにしろ、グルジア共和国にしろ、東欧諸国にしろ、この民族の連鎖反応による拡散状況は、ますます差異単位を小さくしながらモザイク状の形態になって分布するのである。

（ 西島建男「民族問題とは何か」第一章 いま民族とは何か ）

全民衆を同一民族に結集していけば、「自民族内の少数民族や境界を接する異民族との関係が『排除の力学』によって抑圧され、衝突の状況になる。」

ソビエト連邦時の中央アジアのプロレタリア国家化のためのヨーロッパ人、ロシア人の流入は、解放とは名ばかりの現地人に対しての「植民地主義」民族格差を生み出した。今日の新疆ウイグル自治地区では、漢族による強行支配がウイグル人差別につながり激しいテロの嵐を呼んでいる。偏狭な民族主義は少数民族・周辺民族への排他的な差別主義を生み出す。インドへの反発でパキスタン、バングラデシュが生み出され、ユダヤ国家イスラエルの誕生（シオニズム）によるとパレスチナ民族の反発、ロシア人の大量の流人に対するカザフ民族、ウズベク民族などの抗争は、それらの例である。

排除や差別ではない道を民族意識は可能にしようだろうか？

どんな辺境のまた大民族の内部の少数民族であろうと、その権利は尊重される必要がある。J・S・ミルが少数意見の尊重に関して述べ、幸福の諸要素のひとつとしての「個性」を訴えたことを、個人から共同体にまで適応すべきである。『自由論』（塩尻公明ほか訳、岩波文庫、七一年）でこういう。

「諸々の差異の存在することは有益であるということ、たとえそれらの差異がより良き方向に向かわずとも、また差異のうちには彼らから見てより悪い方向に向っていると思われるものがあるとしても、なお、差異の存在することそのことが有益であることを理解するに至らない限り、一個性がその地歩を維持することはますます困難となるであろう」

単声的・一元的でなく、多声的・多元的であることは、差異（他者）に対して開かれていることから生じる。閉ざされた出口なき孤独による自己同一性（アイデンティティ）では、対話的關係と相互作用による共存は生じえない。現代の民族紛争が、「閉ざされた民族主義」というモノローグから生じていることは、パレスチナ問題やスリランカ、インドのシーク民族主義、アゼルバイジャンとアルメニア、北アイルランドなどの紛争にもみられる。

（中略）

自己を定立しながら自己を不定立な両義性に持ち込むというのは矛盾である。だが、「民族」というものこそ、こうした矛盾体なのではなかろうか。民族というものは自明であるようにみえて自明でもないのである。純粋民族などありえようか。なんらかの交通により雑種民族となっているのが普通である。民族主義のイデオロギーとは、純粋民族という虚構性から生じるものであり、他民族の排除とは自己疎外の別名でもあるのだ。だからなお残酷化するともいえる。

民族問題とは、エコロジーやフェミニズムとともに、自己意識の変革を含み込んでいるから、長い時間と苦難の道が必要となるのである。簡単な解決法など存在しないのだ。

（ 同 ）

ミルの言うように「差異」が有益であることを理解すること、多声的・多元的であるこ

とは、差異（他者）に対して開かれていることから生じる、ということを信じるが大切なのだ。「純粋民族」という虚構性によって「差異」として現れる他民族を排除することは愚かなことなのである。



白鵬の問題に戻ろう。

彼がここに抱えた民族的な違和感・・・それは「本当に肌の色は関係ないんだよね。この土俵に上がって、まげ結ってることになれば日本の魂なんですよ。みんな同じ人間です。」というところに表れている。なるほど相撲は「国技」と言われ「日本書紀」にも「古事記」にも力士の話が書かれているし、朝廷や武家政権とも深いつながりを持ってきた日本の伝統的な格闘技ではある。（もっともモンゴルの格闘技「ブフ」の方が相撲より発祥は古いという説もある）

柔道は海外にも優秀な選手が多くもはや日本のお家芸ではない。相撲は外国選手を入れることによって海外にも知られるようになった。今や外国選手を入れて新風を吹き込み、スポーツを活性化することは当たり前の時代である。（サッカー、野球・・・）互いの特徴をいかし、その差異に学び、より活力あるスポーツに発展させていくことこそが大事なことでないか。たしかに日本人の相撲取りに元気がないのは気になるが、海外選手に対する差別や排除はもってのほかであろう。何が違うのか、やせっぽちのモンゴルの少年が、日本で大力士になっていったその姿を、しっかり見つめなおすことから＜日本＞の相撲が始まらねばならないはずだ。

